

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第44輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

伏尾遺跡

B 地区

—— 発掘調査報告書 ——

平成元年 6月30日

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第44輯

近畿自動車道和歌山線建設に伴う

伏尾遺跡

B 地区

— 発掘調査報告書 —

平成元年 6月30日

大阪府教育委員会
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

卷頭図版 1
遺跡全景（B区）





序 文

堺市は、大阪市の南部に流れる大和川より南に位置するとともに泉州地方の北部に市域が位置しています。今回調査をおこなった伏尾遺跡は、堺市街地の南に位置し、泉北ニュータウンの泉ヶ丘地区の北端丘陵に接しています。

この地域は、泉北ニュータウン造成以前の地形を生かし5世紀から9世紀にかけての古代窯業（須恵器）の中心的な生産地としての著名な『陶邑』古窯跡と関連の集落跡、古墳等の遺跡が分布しています。

本遺跡は、関西国際空港のアクセス道路（松原市－海南市）としての近畿自動車道和歌山線が建設される予定内に含まれており、本道路は出来る限り早期に供用が望まれている路線でもあります。

調査は、昭和63年度に実施し、その後整理作業を継続して行ったものであります。その結果、縄文時代、弥生時代、古墳時代、中世にかけての各種遺構が検出されています。これらの成果からこの地域の地誌を初めとした資料を得ることが出来た。

調査の成果については、本報告書に詳しく記載されていますが、今回の調査結果は、古代から中世にかけての人々の生活の跡が辿れることが判り、今後古代窯業生産との関連研究に利用されるものと思量されます。

本発掘調査を実施するにあたり、日本道路公団大阪建設局大阪工事事務所、堺市教育委員会、その他地元関係者の皆様と、調査を担当された（財）大阪府埋蔵文化財協会の皆様に、深く感謝いたします。

これから文化財行政に対するご理解とご援助をお願い申し上げます。

平成元年6月30日

大阪府教育委員会

文化財保護課長 川瀬

誠

序 文

伏尾遺跡は、いわゆる「陶邑」の門口部にあって、その存在は古くから注目を浴びてきた遺跡であります。昭和62年度の本協会の試掘調査等によって弥生時代から中世にかけての複合遺跡であることが確認され、本年B地区と併行して調査が行なわれているA地区では期待に違わぬ成果が現在報告書として、纏められています。今回のB地区は石津川の形成した氾濫原にあたり遺跡本体（A地区）とは相当様相を異にすることが予測された地域であります。

今回の調査結果については、本報告書に詳しく記述しているところでありますが、予測された通り、縄文時代から古墳時代にかけての小河川が縦横に検出され、空白期の奈良、平安時代を経て、中、近世以降水田化するという変遷が明らかにされました。従って遺構としては顕著な成果は現われませんでしたが出土遺物の中に特色ある遺物が数多く認められました。特に古墳時代後期（6世紀）須恵器の中の土管状の須恵器は類例の中では最も古く、大きさも最大のもので用途等の解明が待たれます。又、土管状遺物と同一器形と想定される破片に書かれた「六」の遺物は、6世紀後半の時期で須恵器工人が漢数字を意識して書いたのであれば、類例の中では最古の例になるかもしれないという貴重な資料です。

本報告書が古代史上、重要な役割を果たした「陶邑」の研究解明に大いに利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました日本道路公団大阪建設局をはじめとする関係各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいている近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し、深謝申し上げます。

平成元年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

例　　言

- 1、本書は、近畿自動車道和歌山線建設に伴い昭和63年度に実施された堺市伏尾に所在する伏尾遺跡B地区の発掘調査報告書である。
- 2、調査は、日本道路公団大阪事務所の委託をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
- 3、調査は、財団法人大阪府文化財協会調査課技師渋谷高秀が担当し、昭和63年7月より平成1年3月25日まで実施した。
- 4、本書では、標高はTPと表示した。色調は、「新版標準土色帳」1987年版によった。
- 5、遺物写真番号は、本文図版番号と一致する。
- 6、本書の編集は、渋谷が担当した。執筆は第1、3、4章を渋谷が、第2章を近藤康司が、第3章の石器の項目は岸本道昭が担当した。
- 7、「六」の漢数字資料は、当協会森村健一、堺市立埋蔵文化財センター嶋谷和彦氏より、弥生土器については、当協会今村道雄、井藤暁子の両名より御教示をうけた。また、石器実測に関して堺市教育委員会小谷正樹氏の協力を得た。記して感謝する。

本文 目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第2章 周辺の遺跡	3
第3章 遺構と遺物	6
第1節 層序	6
第2節 縄文時代	8
第3節 弥生時代～古墳時代	12
第4節 中・近世	34
第5節 包含層出土遺物	36
第4章 まとめ	38
第1節 遺跡の変遷	
第2節 出土遺物について	

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 周辺遺跡分布図	5
第3図 基本層序模式図	7
第4図 縄文時代河川跡位置図	9
第5図 縄文時代河川跡土層断面図	10
第6図 16-O R出土遺物実測図	11
第7図 遺構配置図	13・14
第8図 A区弥生～古墳時代遺構配置図	15・16
第9図 A・B区弥生～古墳時代遺構平面図	17・18
第10図 C区弥生時代遺構平面図	19・20
第11図 C区07-O R土層断面図	21
第12図 08-O R・19-O X土層断面図	24
第13図 弥生時代中期後半溝土層断面図	25
第14図 A・D区遺構平面図	26
第15図 19-O X木器出土状況（1）	28

第16図	19-O X木器出土状況（2）	29
第17図	19-O X木器出土状況	30
第18図	07・10-O R出土遺物実測図	30
第19図	19-O X出土遺物実測図	31
第20図	08・09-O R、19-O X出土遺物実測図	31
第21図	05・07・10-O R出土遺物実測図	32
第22図	08-O R出土遺物実測図	33
第23図	中世出土遺物実測図	34
第24図	D区土層断面図	35
第25図	包含層出土遺物実測図	37
第26図	「六」（原寸）	40

図版目次

図版1	航空写真	図版15	〃 D区全景
図版2	遺跡 繩文時代河川跡	図版16	〃 D区全景・土層断面
図版3	〃 A区全景	図版17	遺物 16・10・05・07-OR
図版4	〃 A区全景	図版18	〃 19-OX, 07-OR
図版5	〃 A区土層断面	図版19	〃 08-OR
図版6	〃 遺物出土状況	図版20	〃 08-OR
図版7	〃 A区08-OR、19-OX全景	図版21	〃 19-OX, 08-OR・包含層
図版8	〃 A区19-OX木器出土状況	図版22	〃 07・09-OR, 包含層
図版9	〃 15-OX土層断面、08-OR遺物出土状況	図版23	遺物 07・10-OR, 中世包含層
図版10	〃 B区全景		
図版11	〃 B区遺構		
図版12	〃 B区土層断面		
図版13	〃 C区全景		
図版14	〃 C区落ち込み、07-OR土層断面		

第1章 調査に至る経緯と経過

近畿自動車道和歌山線建設に伴い堺市伏尾に所在する伏尾遺跡の発掘調査をおこなった。今回調査の対象となったのは、インターチェンジ・料金所建設予定地のB地区と平面道路建設予定地のA地区である。A地区は、丘陵によって構成されるが、B地区は、石津川の形成した氾濫原にあたり、低湿地である。付近では、大庭寺遺跡や野々井遺跡・小阪遺跡が既に調査され、各時代の遺構・遺物が検出されている。

伏尾遺跡は、昭和62年度に大阪府埋蔵文化財協会によって坪掘・トレンチ調査を各実施しており、弥生時代～中世にかけての遺跡であることが確認されていた。

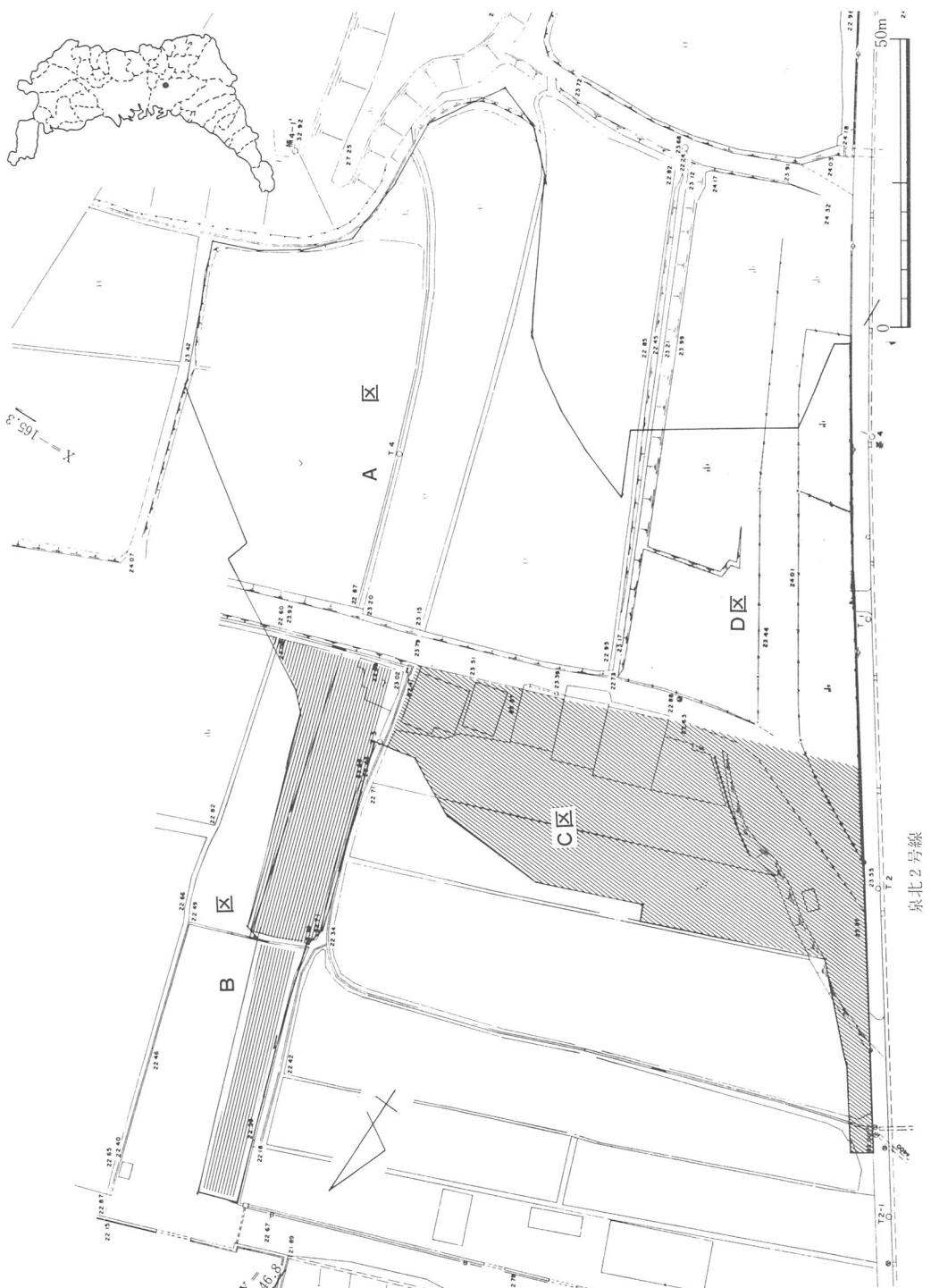
伏尾遺跡B地区の発掘調査は、11200m²を対象として実施した。調査対象地はインターチェンジ建設予定地のため不定形な形を呈する。調査は、反転方式で4回に分けて実施した。調査の便宜上、各区にA～Dの地区名を付した（第1図）。調査は、現代耕土・床土・盛土を機械掘削し、それ以下を人力掘削した。A区は、昭和63年8月より、B区は11月より、D区は12月より、C、D区は平成元年1月より、順次調査を実施した。各区の調査の終了に合わせて大阪府教育委員会の立合がおこなわれた。その結果、B地区で検出した遺構は、記録保存のみをおこなった。また、A地区で検出した縄文時代の河川跡については大阪府教育委員会の判断でトレンチ調査によって方向、規模が推定できるとされたため、全面的な発掘調査は実施しなかった。

調査に際しては、対象とした遺跡が低湿地のため、調査区内に下位の層序を確認するためのトレンチを縦横に設定し、土層観察を行ながら順次調査を進めた。

測量は、測量業者に委託して行った。第VI座標を使用して3級、4級基準点を調査区内に機械掘削終了時点に合わせて順次設置した。4級基準点は、協会指定のX、Y座標にのって打ち込んでおり、この点から4m方眼の地区割りを行い、遺物取り上げの最小単位とし、また遺構実測の基準点にも利用した。

航空測量は、昭和63年11月17日にA区、12月1日にB区、平成元年2月3日にD区、2月28日にC区と調査の工程にあわせて順次実施した。

調査の全工程は、1989年3月25日に終了した。



第1図 遺跡位置図

第2章 周辺の遺跡

伏尾遺跡A・B地区は、石津川中流域右岸に位置し、B地区は石津川中流域の東側に展開する中位段丘と石津川に挟まれた沖積段丘上に、A地区は中位段丘上に立地する。

石津川流域は、各時代にわたって泉北地域の中心的位置を占めるため、地理的・歴史的環境については、既に詳細に展開され、多くの成果が蓄積されている。よって、詳細は既述の論文に譲り、以下では、伏尾遺跡B地区の主要な遺構・遺物の時期である弥生時代から古墳時代にかけての周辺の遺跡を概観する。

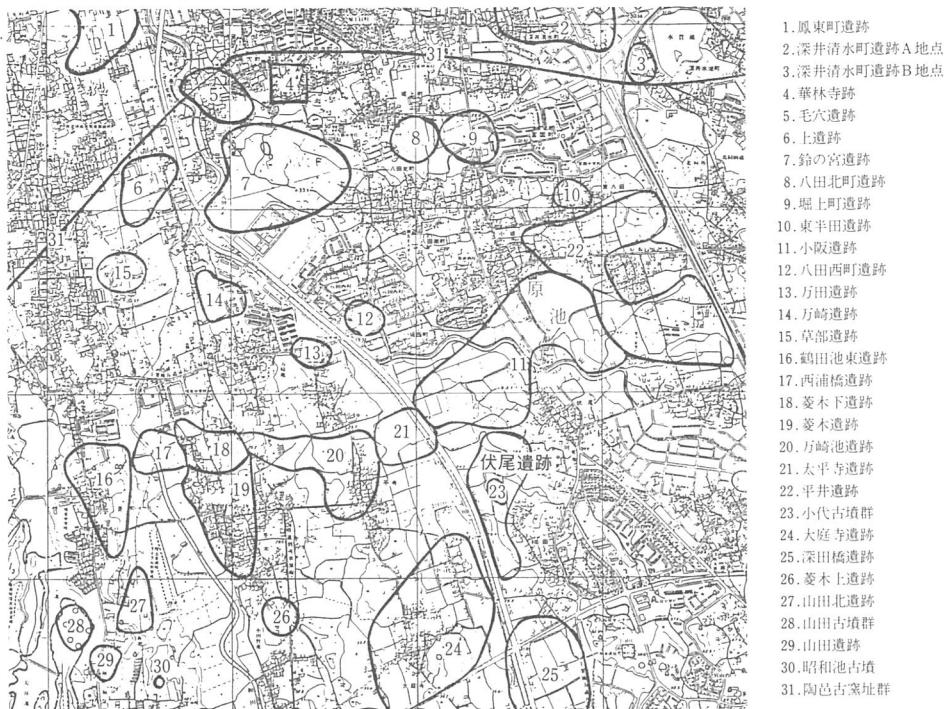
石津川流域における弥生時代の成立は、四ツ池遺跡にみられる。遺跡は、下流域の低位段丘である三光台地一帯に位置する。四ツ池遺跡は、縄文時代中期から後期頃には既に成立しているが、集落として大きく展開するのは弥生時代に入ってからである。四ツ池遺跡は、その立地・規模・存続期間からみて、石津川流域における拠点集落としての性格をもつ。四ツ池遺跡では、弥生時代前期と中期に各二条のV字溝が掘削されている。このV字溝は、その規模・位置・堆積状況からみて集落を取り巻く溝と考えられたため、四ツ池遺跡は環濠集落と想定される。集落の立地は、台地上・台地東側・台地の東北部と大きく三つに分けられる。墓域と想定される地点は、二ヶ所あり、方形周溝墓が築かれている。四ツ池遺跡においては、弥生時代前期には、集落と墓域は区別されておらず、未分離の段階と想定される。他に、石津川流域において弥生時代前期の遺構・遺物は、浜寺元町遺跡、黄金山遺跡、石津遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、小阪遺跡等の各遺跡にも存在する。

弥生時代中期の遺跡は、前期から続く四ツ池遺跡、浜寺元町遺跡、黄金山遺跡等があり、また、新しく中期に成立する遺跡としては、石津川下流域の四ツ池遺跡周辺では、諏訪の森遺跡や日明山式壺形土器が顕著な日明山遺跡がある。石津川中流域では、中位段丘上に毛穴遺跡、鈴の宮遺跡、西浦橋遺跡、万崎池遺跡、菱木下遺跡、鶴田池東遺跡が成立する。また、万崎遺跡では明確な遺構はみられないが、磨製石剣・蛤刃石斧が出土している。さらに最近の調査成果では、中位段丘上に位置する伏尾遺跡A地区で住居跡等が、下田遺跡では、竪穴住居跡・壺棺墓等が検出されている。また、野々井遺跡でも径約10mの大形竪穴住居跡が検出されている。この時期になり、石津川中流域で初めて竪穴住居・掘立柱建物・方形周溝墓等が営まれるようである。

弥生時代後期では、前期以来の四ツ池遺跡、黄金山遺跡が存続するが、四ツ池遺跡では

後期には住居跡の数も少なくなるようである。また、中期以降の集落では万崎池遺跡が存続している。小阪遺跡では新たに弥生時代後期の土器がみられる。四ツ池遺跡でもみられたように弥生時代前期・中期以降の伝統をもつ低地の各集落は、西の辻N・I式並行期には、廃絶あるいは規模を縮小するものが多い。この現象は、単に石津川流域にとどまらず大阪湾岸の兵庫・和歌山などの一連の拠点集落においてもみられる。この時期の集落の高地への移動とこの低地の拠点集落の一連の現象には、何らかの関係が存在すると考えられる。より広範囲に大規模に展開する弥生時代の「ムラ」の異変の意味を考察することは、当時の政治・経済的なしくみを眼前に提示する糸口になるものと想定される。伏尾遺跡A地区は、石津川中流域を一望の下に見下ろす段丘上に立地するが、弥生時代中期から後期の住居跡が検出されており、この現象に類するものであろうか。

弥生時代から継続して古墳時代前期へと存続する集落としては、四ツ池遺跡、石津遺跡、野々井遺跡、小阪遺跡がある。さらに、布留期の集落としては四ツ池遺跡、石津遺跡、船尾西遺跡、下田遺跡、大平寺遺跡等があげられる。弥生時代の石津川流域における拠点集落である四ツ池遺跡は、古墳時代においても有力な集落としての位置を占める。古墳時代中期には、百舌鳥古墳群の造営が開始され、陶邑古窯群における須恵器生産も開始される。陶邑における須恵器生産に関連した製作工人の集落と考えられる遺跡は、須恵器を製作する道具である当て板や原料に使用したと想定される粘土塊などが出土した小阪遺跡、西浦橋遺跡、菱木下遺跡があげられる。また、野々井遺跡や伏尾遺跡A地区も陶邑古窯群に近接しており、その立地や出土した遺物あるいは検出遺構などからみて、須恵器生産に関わった集団が存在した可能性が高い。一方、深田遺跡や辻之遺跡のように、掘立柱建物の構成や須恵器の出土量からみて、生産された須恵器を集散する地点であると考えられる遺跡も存在する。これらの須恵器生産に関わった集団の墓も陶邑古窯跡群周辺にみられる。この地における古墳は、古墳時代前期に割竹形石棺を主体部にもつ二本木山古墳が築造されている。古墳時代後期には、牛石古墳群、桧尾塚原古墳群、陶器千塚古墳群などの群集墳が存在する。牛石古墳群は、約15基で構成され、横穴式石室をもつ前方後円墳の高塚山古墳や、木心粘土櫛を主体部にもつ5号墳、7世紀に属し埠積式の横穴式石室をもつ13、14号墳などが存在する。桧尾塚原古墳群は、約10基からなり、前方後円墳2基を含む。木心粘土櫛も1基含まれる。陶器千塚古墳群は、約30基からなり、2基の前方後円墳も含まれる。木心粘土櫛は、「カマド塚古墳」と称される21号墳、棺に須恵器の円筒棺を用いている29号墳の2基がある。以上の3つの古墳群には、須恵器生産に関連する被葬者の墓と想定す



第2図 周辺遺跡分布図

ることのできる特徴をもつ古墳が群内に数基存在する。また、野々井遺跡で検出された約50基の古墳や伏尾遺跡A地区の4基の古墳も、各遺跡の位置などから考えて、須恵器生産に関与した集団の墓である可能性が高い。また、万崎池遺跡、菱木下遺跡、野々井遺跡、伏尾遺跡A地区で検出された土坑墓群の被葬者は、古墳に葬られることはなかったが、須恵器生産に関連した集団員の墓である可能性がある。

参考文献

- 大阪府埋蔵文化財協会『伏尾遺跡・大庭寺遺跡発掘調査』（現地説明会資料19）1988
 大阪府教育委員会『陶邑I～V』1976～1979
 帝塚山大学『四ツ池遺跡』1969
 大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』1984
 大阪文化財センター『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書II』1984
 堺市教育委員会『四ツ池遺跡・陶器千塚29号墳』1984

第3章 遺構と遺物

伏尾遺跡B地区からは、各時代の遺構・遺物を検出した。検出した遺構は、縄文時代や弥生時代中期の自然河川、古墳時代後期の溝・河川の岸、或は、中近世にかけての水田などがある。検出遺構は、主には河川で遺構の密度は疎である。

縄文時代から古墳時代の遺構は、自然の河川が主である。この時期は、河川が縦横に走り、生活面の存在する余地は遺跡内にはなかったものと想定される。

縄文時代の河川は、3条検出し、調査区内をほぼ東から西、或は北西方向に流れる。

弥生時代～古墳時代の河川は10条検出した。これらの河川は、南東から北西方向に流れる。地山はA・B区においては多少の高低差は存在するもののほぼ平坦面で形成されるがC・D区においては急激に西方向に落ちる。この崖状の落ちは、方向・規模・形状・堆積状況から判断して旧石津川の東岸に該当するものと考えられる。旧地形の落ちのラインと現在の水田の地割りは合致する。

7～8世紀の遺構は検出しなかったが、遺物は中世の包含層中に少量存在する。

中世～近世にかけては、水田が主要な遺構である。

出土遺物は少なく、コンテナにして7箱である。主には河川から出土した弥生時代前期～後期後半の土器・石器、古墳時代後期の須恵器・木器があり、他に量的には微量ではあるが縄文時代の土器、中世の瓦器・土師器、近世の陶磁器などがある。須恵器が量的には最も多く、他の遺物は少ない。9～12世紀の土器類は存在しない。

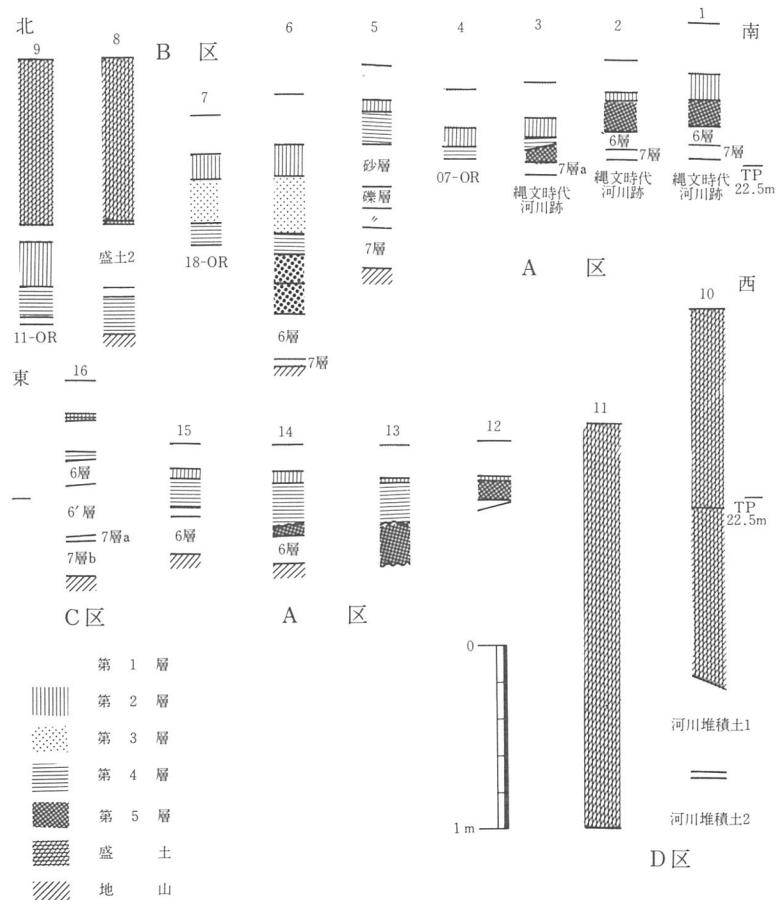
特記すべき遺物としては、古墳時代後期の6世紀後半の土管状の土器や「六」とヘラで外面に線刻された土器がある。

第1節 層序

調査区の現状は、里道・水田・民家・荒地によって構成される。現地盤には高低差があり、盛土で構成される荒れ地部分は高く、水田部分は低い。また、水田部分も石津川に遠い東南地域は高く、川に近い北西地域は低い。調査区は、石津川の氾濫原で低湿地にあたる。基本層序は以下のようになる。

1層 a 現代盛土 D区、C区の一部に存在する。厚く、D区では2m前後もある。石津川の旧地形を造成し水平にしたため厚くなっている。

- 1層 b 現代耕土 現代盛土がされた地区以外の全域に存在する。
- 2層 現代耕土がある地域、A・B・C区の1部に存在する。
- 3層 a 10Y灰色(6/1)粘土 A区の東半分を中心として分布する。
- 3層 b 2.5Y黄色(8/6)粘土 分布する地域は3層aの分布する地域と同じである。
- 4層 7.5Y灰色(5/1)粘土 調査区の全域に堆積する。下面の凹凸が顕著に目立つ。遺物は、中世の瓦器・土師器が量的には少ないが存在する。
- 5層 2.5YR赤灰色(5/1)シルト A区・B区・C区に存在する。古墳時代後期遺物を含む。遺物は万遍なく分布するのではなく、量的に少ない地域と多い地域がある。
- 6層 10YR灰白色(8/1)シルト 6層はA区を中心に分布し、東が厚く40cm前後あり、西に向かって薄くなる。遺物は包含しない。この上面より、弥生時代の河川が切り



第3図 基本層序模式図（数字は、第7図に一致する。）

こむ。

7層a 10YR灰白色(8/1)シルト A区に分布する。B区には存在しない。B区でこの層に対応するのは7層bである。この層の上面から、縄文時代の河川が切り込む。

7層b 10YR黒色(2/1)シルト 調査区北側B区に分布する。薄く10cm前後である。遺物は含まない。

8層 10BG青灰色(7/1)シルト 無遺物層で、地山である。調査区の全域に存在する。厚さは2m以上ある。調査区の西側は高く、東に向かって徐々に低くなる。

第2節 縄文時代

縄文時代の遺構は、A区の南部の7層上面で検出した河川3条（第4図）がある。この河川は、大阪府教育委員会の立会によりトレンチ調査によって、方位・規模・堆積状況・時期が判明すると判断したため、全面的な調査は実施しなかった。2条の河川は、層位的には弥生～古墳時代の河川が検出された面の1層下位に切り込み面をもつ。埋土は各河川共に砂層・粗砂の堆積が顕著である。遺物が出土したのは16-ORのみであるが、同一面で検出したことを根拠に15-ORは、縄文時代の河川跡とし、17-ORについては、15・16-ORに両肩をきられるため、検出面は不明であり、遺物も出土しないため縄文時代の河川跡と判断する根拠は層位、遺物共にないが、堆積状況が15・16-ORとよく似ており位置も比較的同じ場所に存在すること等を根拠として、15・16-ORより古いが余り時間差を持たない時期の河川としておく。

15-OR（第4・5図、図版2）

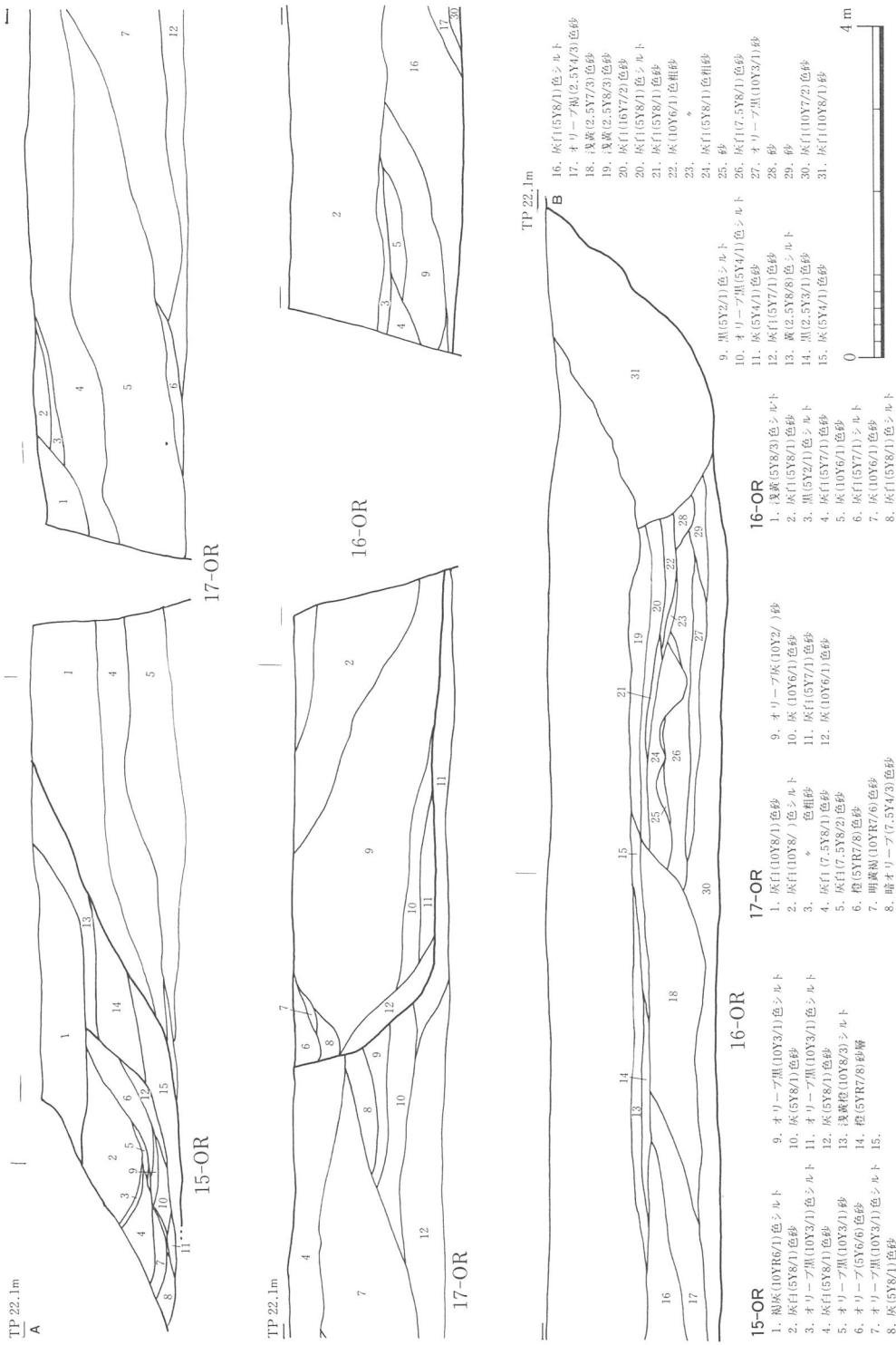
調査区中央を横切る形で東から西方向に流れる。幅8m以上、深さ1.7m前後と推定できる。弥生時代の河川である、05・07-ORに北肩を大きく切られるため、断面形については片側しか判明しない。検出した片側の肩の形状は、緩やかに落ち込む。堆積土は大きく3層に区分できる。下層は、明青灰色(7/1)粘土で南部分に主に堆積する。中層は灰白色(8/1)砂層・オリーブ黒色(3/1)砂層・オリーブ色(6/6)砂層が交互に堆積する。砂層が主体を占める。砂は3mm前後で細かい。色調が違うだけで砂層の質については同じである。中層は、急激な流れによる堆積と考えられる。上層は、褐灰色(6/1)シルト層である。各層共に遺物は出土しないが、自然木が多い。

16-OR（第4・5・6図、図版2）

A区の最南端を南東から緩やかに南に蛇行しながら西北方向に流れる河川で、幅10m以



第4図 繩文時代河川跡位置図



第5図 繩文時代河川跡土層断面図

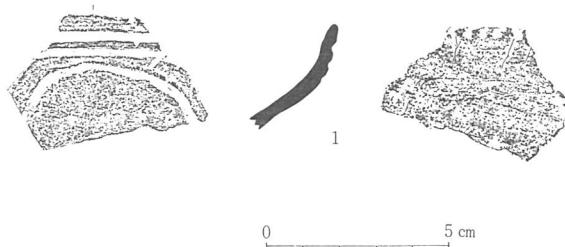
上、深さ1.6m前後を測る。断面形状はU字形を呈し、7層上面より急激に落ち込む。東側では、水色シルトの地山を明確に切りこんでいる。堆積土は、大きく4層に区分でき、最下層の4層は、砂層・シルト・粘土層が交互に薄く主に西側部分に堆積する。これらの層間には、木々の葉や自然木が多く含まれる。3層は、4層を切るようにして西側に堆積する層で、灰白色（8/1）砂層である。2層は、砂層・シルト・粘土の堆積土であり、斜めに堆積する。4層のように薄い堆積ではなく厚い。最上層、1層は淡黄色（8/3）砂層である。最も厚いところは1m前後と厚い。堆積土は交互に堆積せず、単純な1層である。

遺物は、最上層の1層から縄文土器・サヌカイト剝片が出土する。縄文土器は3点出土したが、2点は細片で器形は不明である。1は浅鉢で（第6図）、口縁部には刻み目を施し、外面には沈線を施す。内外面荒いナデ調整で仕上げる。胎土は粗い。時期は、縄文時代中～後期と考えられる。

17-O R（第4・5図、図版2）

河川17は、河川15・16に両肩を切られるため、流れの方向、規模、断面形状は不明である。深さは2m以上を測る。河川の流れる方向は、堆積状況・高低差から判断すれば、東北から北西方向に流れるものと想定される。堆積土は3層に区分できる。堆積土は各層共もおおむね南西から北東方向に落ち込むように堆積する。下層は、灰色（6/1）・オリーブ灰・暗オリーブ色（4/3）等の砂層である。16-O Rの東側に薄く水平に堆積する。中層は緑灰色（6/1）粗砂・明黄褐色（7/6）粗砂が主体で共に厚い。この層には調査区内の地山の水色シルトが塊になって混入・堆積しており、上流で地山を削るほどの激しい水の流れがあったものと想定できる。これらの層は、南西が薄く、北東が厚く堆積する。上層は、灰白色（8/1）シルト・灰白色（8/1）灰白色（8/1）粗砂で、この粗砂とシルト層が厚く堆積する。自然木が多く出土する。

遺物は各層共に出土しない。



第6図 16-O R出土遺物実測図

第3節 弥生時代～古墳時代

弥生時代～古墳時代の遺構は、溝・河川や石津川の旧河川東側の肩に該当する「岸」などがある。弥生時代～古墳時代にかけての遺構検出面は、6層上面である。遺構面は、東南が高く、北西が低い。自然河川と考えられる遺構は9条検出した。A区で検出した河川は調査区の東南から西南に向かって、自然地形の勾配に沿って、直進あるいはカーブをえがきながら流れる。

05、07、08、13、14—ORはA区で、10、11、18、19—ORはB区で検出した。各河川共に粗砂・砂・シルト・粘土が堆積するが、特に粗砂層の堆積が目立つ。

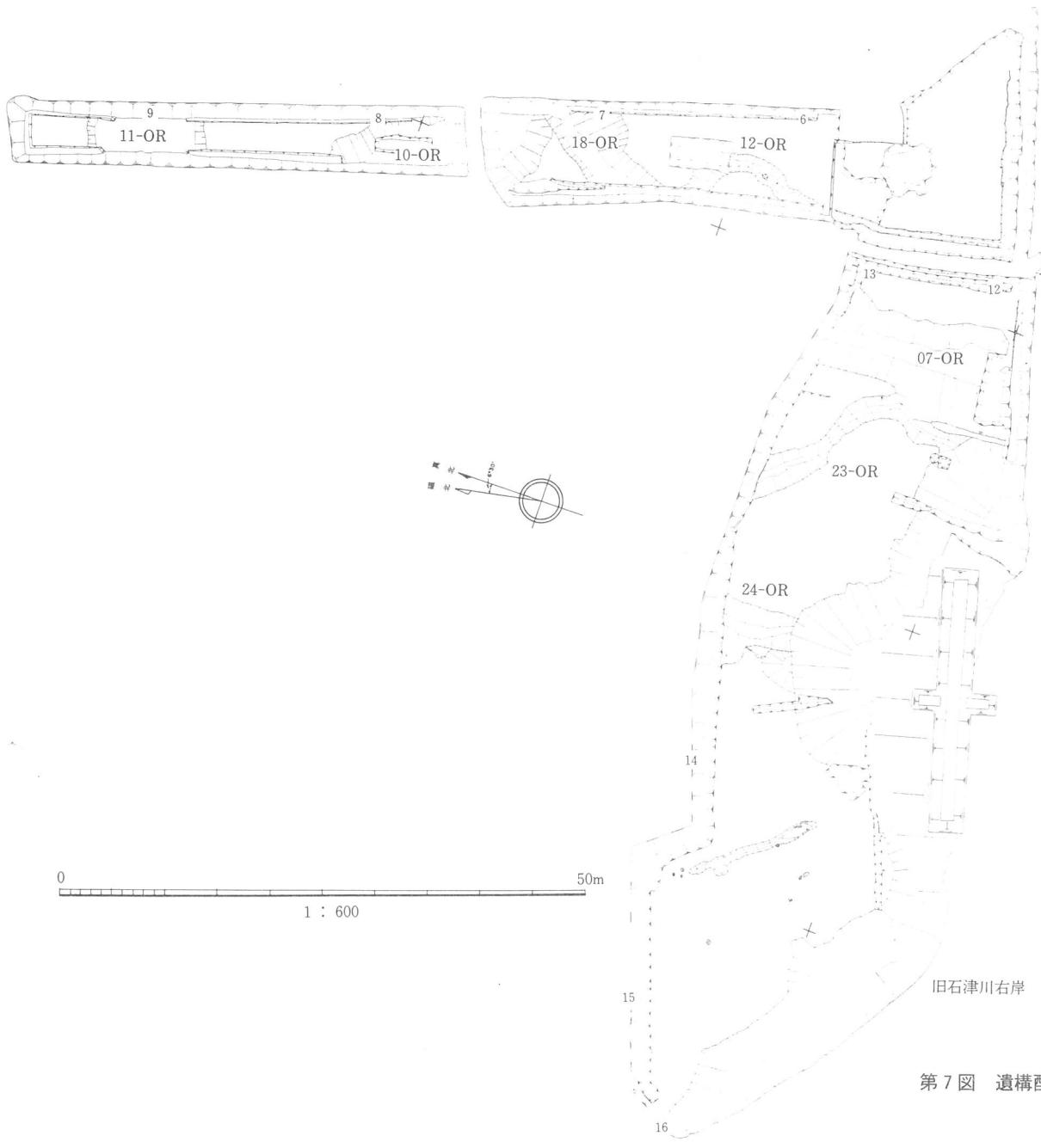
07—OR（第7・9・11・13・18・21、図版3・4・17・18・22・23）

07—ORは、A区のほぼ中央を東南から北西方向に自然地形の高低にそって流れる。中央付近で05—ORと合流する。規模は、検出した最上流で、幅3m・深さ0.95m、中央で幅6.5m・深さ1.8m、最下流で幅8m・深さ1.5mを測る。05—ORと合流する地点から下流は、河川の幅が倍近く大きくなっている。断面形状はなだらかに落ち込み、底面は凹凸が激しい。河川は水色シルト層（地山）を切りこんでいる。7—ORは、3回にわたって流れを変える。方向は、時期が新しくなるにしたがい西側に徐々に移っていく。最も古い時期の堆積土である第1次堆積層は、東側に存在する明緑灰（8/1）色粗砂層で厚く1層のみの堆積である。粗砂層のみの堆積のため、水の流れが急激であった事が判明する。第2次堆積層は、粗砂・灰シルト・オリーブ黒（2/1）シルト・砂層が堆積する。第1次と第2次の堆積土の上には、灰白（7/1）色シルト層が厚く60cm前後堆積する。最も新しい時期の第3次堆積層は、最下層にオリーブ黒（2/1）色シルトが堆積し、順次上層にむかって、粗砂・砂が堆積する。堆積状況からは、第1次と第2次の堆積土が時期的には連続して堆積するが、1・2次と3次の堆積層には時間的な断絶がみられる。

遺物は各層から出土するが量的に少ない。出土地点も時代・地区によって疎密があり、弥生土器は河川の上流から出土し、古墳時代後期の土器は下流のほうから出土する。

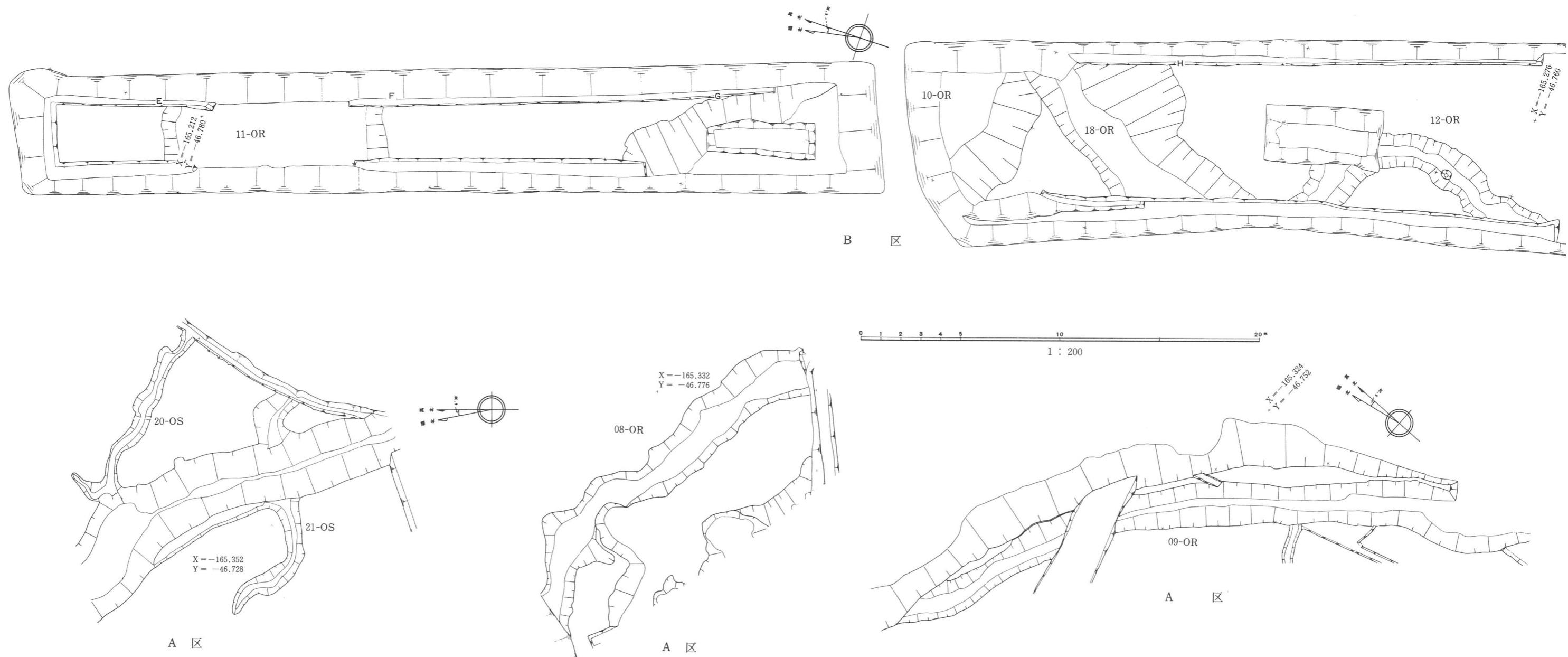
弥生土器は第1・2次の堆積層から出土する。第1次堆積層からは弥生前期の土器が、第2次堆積層からは弥生中期の土器・石器が、第3次堆積層からは古墳時代後期の土器が出土する。（第18・21図）

第1・2次堆積層出土遺物には、弥生土器・石器・サヌカイト剝片がある。第1次堆積層から出土する弥生土器には、壺・甕・蓋がある。壺（第21図・6・8）は、2点出土す



第7図 遺構配置図

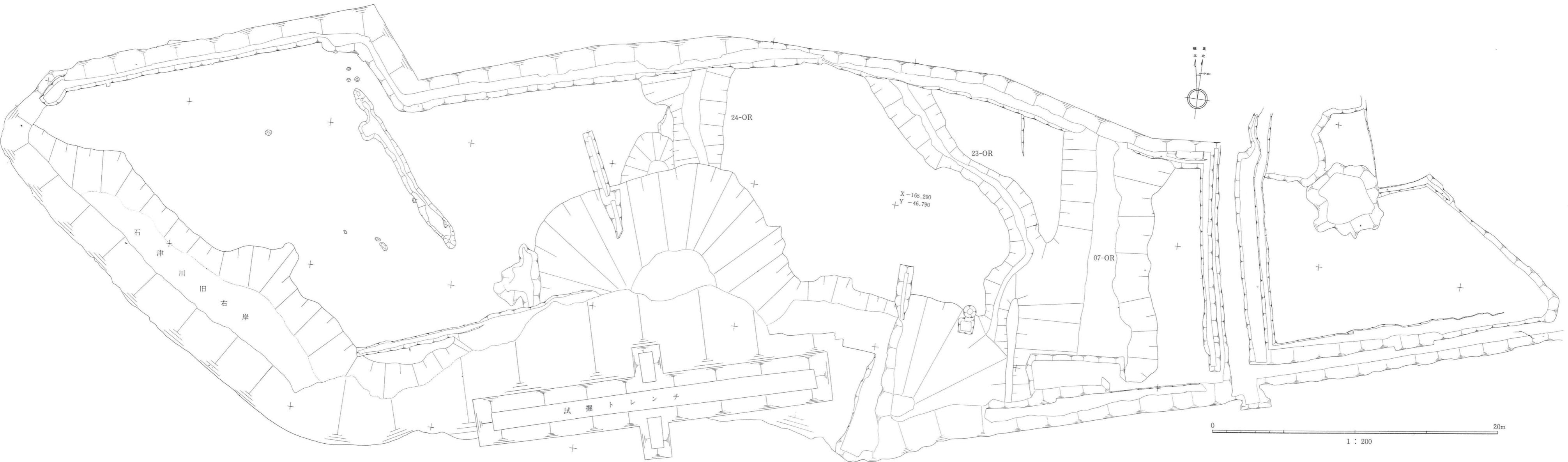
数字は土層図（第3図）に一致する。



第8図 A区弥生～古墳時代遺構平面図（アルファベットは土層図に一致する）



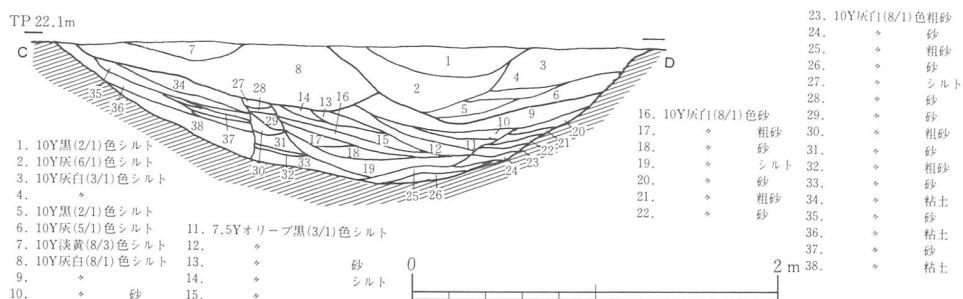
第9図 A・B区弥生～古墳時代遺構平面図（アルファベットは土層図に一致する）



第10図 C区弥生時代遺構平面図

る。6は、口縁部破片である。ゆるやかに外反する口縁部は、端部に面をもち、1条の沈線が巡る。口縁部の内外面にはヨコ方向のナデ調整をおこない、口縁部内面下位は縦方向のナデ調整を施す。外面には粘土の接合痕がある。胎土は、微量の砂粒を含むが良好で、焼成はやや甘い。色調は5Y灰白(8/2)色である。形態はやや縄文土器の形態を残している。壺の底部(8)は、平坦な底部に緩やかに丸びを帯びて立ち上がる体部をつける。調整は摩滅のため不明である。内面は黒色で外面は灰白色を呈する。甕(7)は、底部は上げ底につくる。器壁厚は、厚くつくられる。細かい砂粒を含み、5Y灰白(8/2)色を呈する。蓋(5)は、平坦な天井部に笠状に開く口縁部を付け、内外面はヨコ方向にナデ調整を施す。外面には黒斑がある。外面は、2.5Y黒(2/1)～にぶい黄(1/3)を呈し、内面は2.5Yオリーブ褐色(4/4)である。胎土かみて生駒西麓産と想定される。1次堆積層出土遺物は、弥生時代I～II様式の土器である。

第2次堆積からは、壺・甕・石器が出土する(第21図)。壺(10・12)は、体部の小破片と底部の破片である。体部の破片(10)は、外面に簾状紋が巡る。壺の底部(12)は、焼成は悪い。調整技法は磨滅のため不明である。甕(9・11・13)は、口縁部と底部の破片が出土した。口縁部破片は、復元口径14.8cmである。口縁は、短く「く」の字形に屈曲し、口縁端部は僅かにつまみ上げる。外面には縦方向の細かいハケ調整を施し、口縁部内外面と体部の最上端部はナデ調整を横方向に施す。胎土には砂粒を含み、外面には煤が付着する。底部は2点出土する。平坦な底部から外反して体部にいたる。共に磨滅が激しく、調整技法は不明である。胎土は、砂粒をふくむ。甕・壺共に弥生時代中期後半の時期と想定される。石器(第18図-1)は、やや横長の剝片を利用した直刃削器である。打面は自然面であり、数回の打撃が観察される。背面は4枚の異なる方向からの剥離痕で構成され、2次調整は図示した下縁に背復両面からなされている。サヌカイト製。



第11図 C区07-O R 土層断面図

第3次堆積層からは、古墳時代後期の土師器・須恵器が出土する（第21図）。土師器は細片のため器種は不明である。須恵器は、壺身・壺蓋・壺・堤瓶が出土する。壺身（14）は、受け部は上方に短く伸び、口縁部は内方に直線的にのびる。灰白色を呈し、胎土は良い。陶邑編年II-1段階と思われる。壺蓋は、体部と口縁部の境界がシャープなもの（16）から不明瞭で沈線もないもの（15）まである。口縁部の内外面は、ナデ調整行う。陶邑編年II-1～4に該当するものと考えられる。器台（17）と想定されるものは、椀状に緩やかに湾曲する。口縁部外面には沈線を施し、沈線の上の位置には刺突文を施す。内外面はナデ調整を施す。胎土は甘く、焼成は悪い。10G Y明緑色を呈する。時期については不明である。

05-O R（第7・9・13・21図、図版3・4・17）

07-O Rと合流する河川で、07-O Rの東側を蛇行して流れる。最上流では、幅5.5m・深さ1.1m、蛇行地点まで幅9.3m・深さ1.5m、07-O Rと合流地点で幅9m・深さ1.8mを測る。S字状に蛇行する地点が当然ながら最も幅が大きい。断面形状は緩やかに落ち込む。堆積土は、灰白色（8/1）色粗砂層が主体であり、他に両方の肩の崩壊土の灰白（7/1）色シルト層がある。他の河川同様に粗砂層の堆積が顕著にめだつ。

遺物は、弥生土器・木器が出土する（第21図）。量的には少ない。甕・壺がある。甕（2）は口縁部を欠く。平坦な底部から斜め上方に直線的に体部が伸び、中央で大きく屈曲する。体部下半をヘラで縦方向に削り調整し、体部中位～上半と内面はナデ調整をおこなう。内面上半は搔き上げるように縦方向にきつく行う。体部の下半部と中央部の境界内面には、接合の際に出来たと想定される凹凸痕が顕著に残る。体部外面全面に煤の付着がある。弥生時代中期後半の時期と想定される。壺（1）は、底部の破片で下半を荒く縦方向にミガキ調整する。時期は弥生時代中期後半であろう。木器（3）は約1/2残存する。薄く作られ湾曲し、中央には1条の突起が巡り、一方には方形の突起が存在する。

13-O S（第7・13図、図版4）

長さ33m以上、幅30～50cmで、深さ30cm前後の細長く小規模な溝を、A区の南端で検出した。同規模の遺構は、13-O Rの北側でも検出した。溝は、07-O Rに流れこむ。堆積土は、1層でオリーブ黒（2/1）色シルト層のみである。遺物は出土しない。

14-O S（第7・13図、図版4）

長さ24m・幅30～50cm・深さ30cm前後で、13-O Rとよく似た規模である。堆積土も13-O Rと同一のオリーブ黒（2/1）シルト層である。規模・堆積状況・遺物出土状況が

同一であることから同一目的の溝と想定される。07-O Rと合流して南西方向に流れる。
出土遺物はない。

10-O R（第7・8・18・21図、図版11・12・17・23）

B区中央を横切る形で4層上面検出でき、18-O Rに切られる。流れの方向は、東から西方向である。規模は、幅10m・深さ1.5mを測り、大型である。断面形状は緩やかに落ち込む。堆積土は、砂層・粗砂層・シルト層が薄く交互に堆積する。砂層の堆積物中には多くの木片が存在する。

出土遺物は少なく、弥生土器の甕の底部と石器各1点である（第18・21図）。甕（第21図-4）は、平坦な底部から内湾し屈曲したあと体部に至る。内外面はナデ調整で仕上げる。色調は黒褐色を呈する。胎土・色調からみて生駒西麓の土器である。時期は弥生時代I～II様式と考えられる。石器（第18図-2）は、不定形なサヌカイト製剝片を利用した直刃削器である。打面は自然面でバルバースカーが顯著である。背面は大きく3枚（うち1枚は素材底面）の剝離痕で構成され、2次調整は3辺に認められるが特に図示した下縁に著しい。調整痕は背面に並列する。他の2方向のものは小さな剝離が並ぶもので、あるいは使用の際に生じたものかもしれない。サヌカイト製。

23-O R（第7・10図、図版13）

C区で検出した。07-O Rの支流である。規模は、幅3m・深さ0.5mを測る。断面形状はU字形を呈する。砂層・シルト層の堆積である。遺物は出土しない。

24-O R（第7・10図、図版13）

C区で検出した。南から北方向に流れる。規模は、幅4m・深さ0.6mを測り、断面形状は緩やかに落ち込む。堆積土はシルト層である。遺物は出土しない。

11-O R（第7・8図、図版11）

B区の最も北端で検出した。幅10m・深さ1m前後を測る。溝の肩は、緩やかに落ち込む。堆積状況からは、2時期にわたって機能していたことが判明する。古い時期の堆積土は、砂・シルト・粗砂層・粘土の交互の堆積である。厚みは薄く堆積する。新しい時期の堆積状況は、古い時期のものと同様である。遺物は出土しない。

12-O R（第7・8図、図版11）

B区で検出した幅1.8～2m・深さ0.3～5mを測り、断面U字形を呈する小さい規模の河川或は溝である。大きく調査区内で曲がる。堆積土は下層にシルト層が、上層には砂層が堆積する。この上層に堆積する砂層は、溝検出面の周辺に散乱する。この事実は、氾濫

によって上層の砂層が時期的に極めて短期間に堆積したと想定できる。遺物は出土しない。

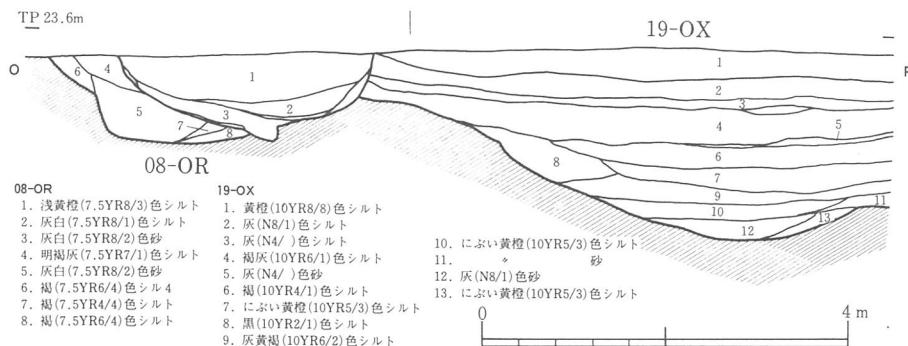
18-OR (第7・8図、図版11)

B区の中央で検出した。10-ORを切るため、時期は10-ORよりも新しい。幅5.5m・深さ1m以上を測り、方向は10-ORとは異なり、北東から西南方向に流れる。断面形状は、緩やかに落ち込む。堆積土は、シルト・粘土が交互に堆積する。出土遺物はない。堆積土中には木片が多く出土する。

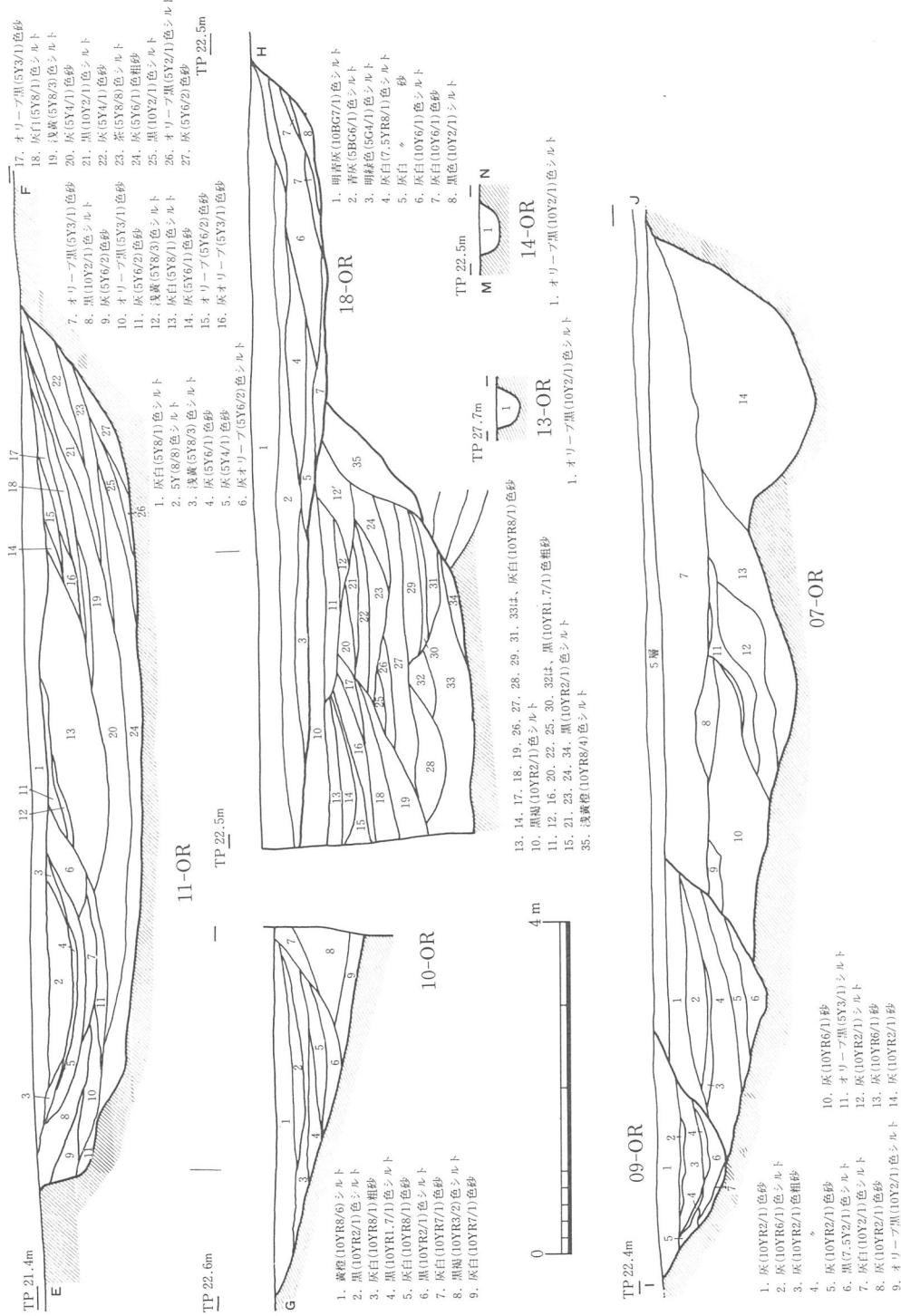
08-OR (第7・8・12・20・22図、図版7・8・19・20・21)

A地区で自然地形の落ち(10-OX)に沿って南南東から北北西に流れる小河川を検出した。幅1.5~2.5m、深さ0.5mで途中から2条に分岐する。一方は、10-OXに流れ込み、他方は更に自然地形の落ちに平行して走る。断面形状はU字形を呈する。堆積土は砂層を主体にして粗砂・シルトが堆積する。急激に流れによって堆積したことを示す。

遺物は、各層から出土するが、層による時期差はない。土師器・須恵器がある(第22図)。土師器は量的に微量で、かつ小破片のため、器種については不明である。須恵器は、壺蓋・無蓋高壺・甕・壺・土管状の遺物・器種不明の破片がある。壺蓋(10)は、口縁部の破片である。天井部と口縁部の境界は、沈線によって区別する。口縁端部は鋭くとがる。調整技法は、内外面をナデ調整する。時期は陶邑編年II-4段階と考えられる。高壺(9)は無蓋のもので完形である。形態は、裾が大きく広がる柱状部に、緩やかに内湾しながら立ち上がる口縁部を付ける。口縁端部は丸く仕上げる。体部外面のへら削り調整は、体部の3分の2程度存在する。土器は、全体に河川内までのロウリングが激しかったのが磨滅が激しい。陶邑編年I-5段階前後と考えられる。土管状の遺物(第22図-1、図版19・20)は、単独で横方向に寝た形で(図版9)出土した。全長97cmを測る。円筒状の遺物ではほぼ直線的に伸び、片方が緩やかにひらく器形である。径は、細い方で、12cm、中間18cm、太



第12図 08-OR・19-OX上層断面図



第13図 弥生時代中期後半溝土層断面図



第14図 A・D区遺構平面図

い方で26cmを測る。内面には粘土を輪状に積み上げたものか、粘土帯を巻き上げたものか不明ながら（図版20）粘土の重なりの跡が残存する。形成技法は、須恵器通有の外面を叩きしめ、内面には青海波の当て板の跡があるが、後の調整技法によって、この外面の叩き・内面の青海波痕を消しているところがある。外面は、径の細い方は約4分の1程度を縦方向の丁寧なナデ調整で、内面については、径の細いほうと中間の粘土の継ぎ目の凹凸の激しいところを荒い縦方向ナデで共に消している。端部の調整技法は、細い方と太い方では異なる。細い方は、丁寧なナデ調整によって口縁端部を調整し、他方は、外面から切り目を入れ、外方から圧力を加えて叩き割っている。このため、口縁端部は割れた跡が残存する。用途については不明である。他に調整技法は違うが、残存した形態からみて、この土管状の遺物と同一の器形になると想定される遺物がある。11は、外面縦方向のハケメ調整、内面青海波の当て板の跡が残存する。外面には、ヘラ記号か漢数字か不明ながら「六」と読める線刻がある。この「六」は、ヘラで線刻する際、線の最終を延ばして描かずしっかりと止めて描く。それ故上と下の区別が明確である。08-O R堆積土からの出土遺物は、陶邑編年I-5～II-4段階までの時期を含む。

09-O R（第7・8・13・20図、図版3・4・22）

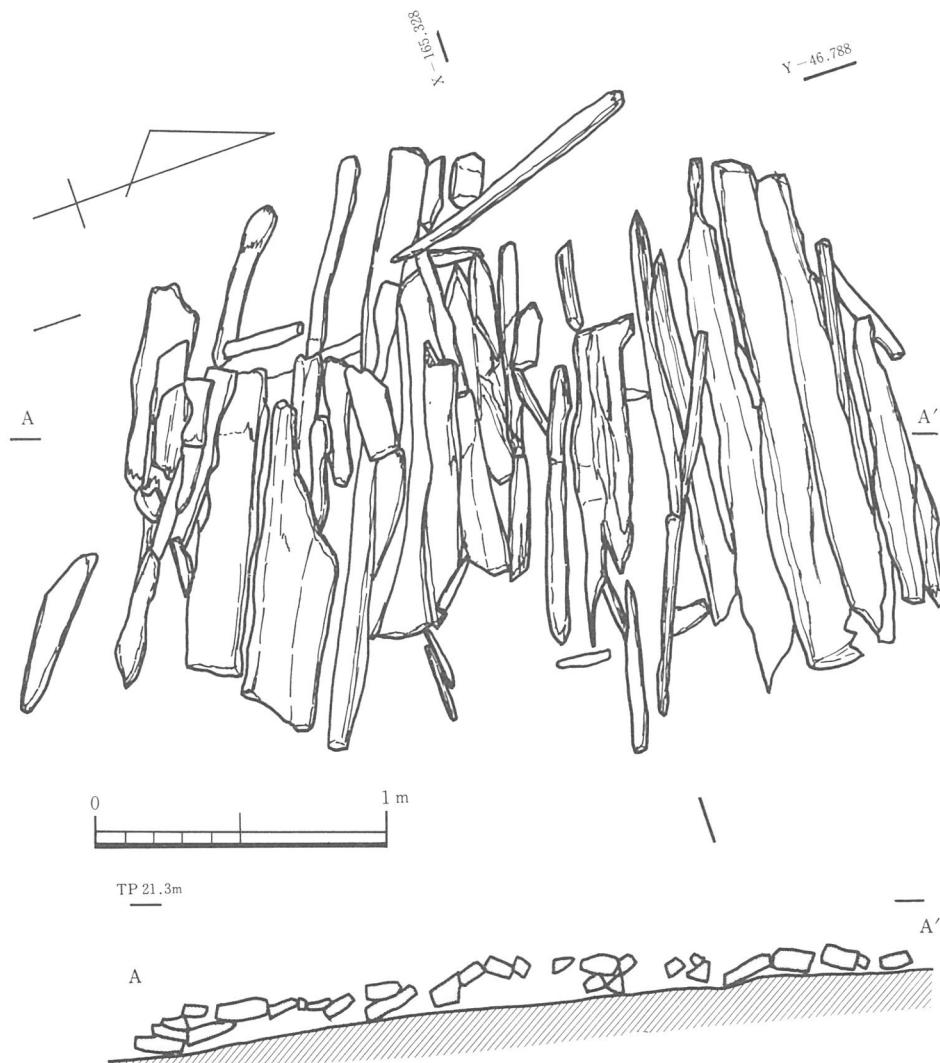
07-O Rを切って、自然地形の高低差に沿い、弥生時代の河川跡と同一の方向の東南から北西方向に流れる。幅2～3m・深さ0.8cm前後を測る。断面形状はU字形を呈す。堆積土は、粗砂・シルト層の互層である。出土遺物は量的には少なく、土師器ではなく、須恵器のみである（第20図）。細片のため器種は明確でないが、体部の破片で外面には叩き、内面には青海波の当て板の跡があるため、甕あるいは壺の破片と考えられる。他に08-O R出土遺物と同一器形になると思われるもの（12）がある。外面を縦方向のハケメ調整をし、内面は青海波の当て板の跡を一部残している。時期については、09-O R出土遺物の時期を参考にすれば、6世紀末のものである。

19-O X（第14・19・20図、図版7・15・16・18・21）

C・D区の南西隅で急激に落ちる自然地形である。この自然地形は、位置・方向・規模からみて、石津川の旧河川の東岸にあたると想定される。この地山をベースとして各時代に護岸が形成されたのである。自然地形は、現在の地割りと同一である。C・D区の盛土部分が河川跡の埋立地に該当する。河川跡のため標高が低く、水平にするために造成したものと考えられる。自然地形は、ほぼ直線的に東南方向から北西に延びるが地形の凹凸が激しい。谷状に窪む地点も存在する。堆積土は、C・D区内で極端に異なり、C区は古墳

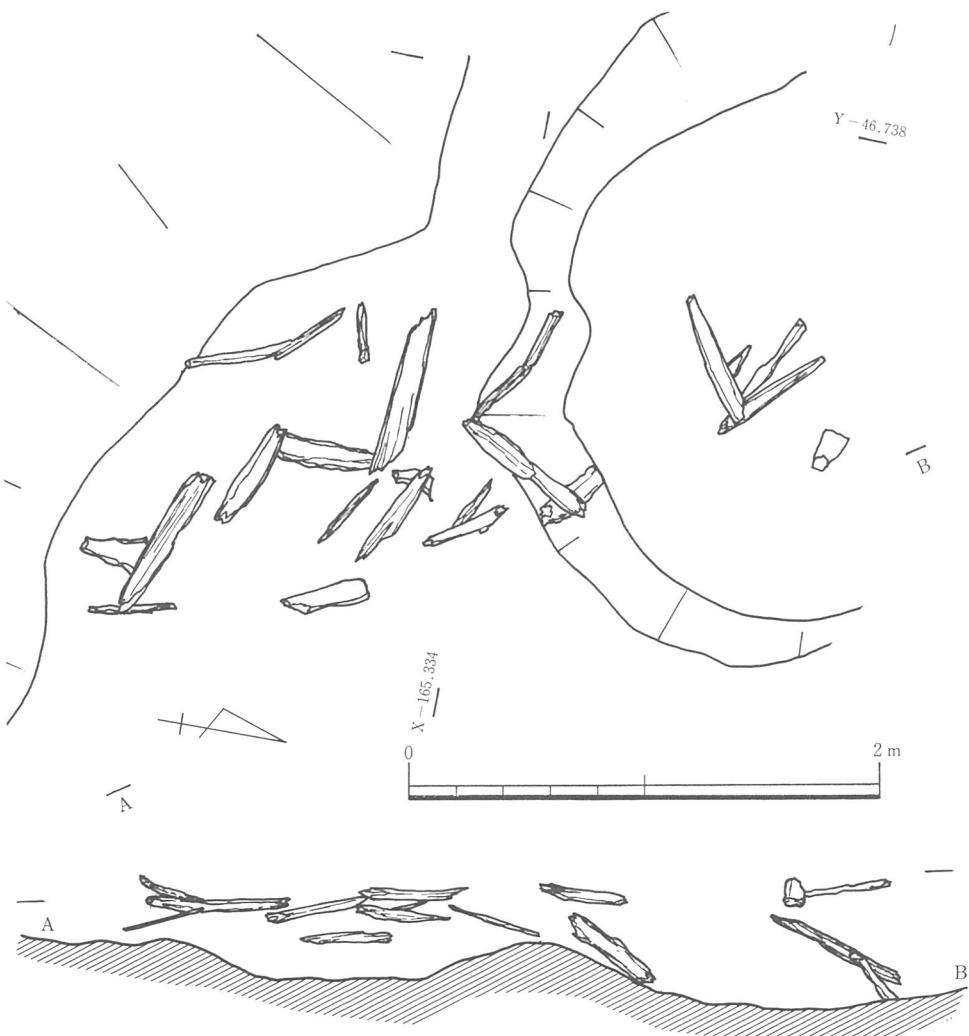
時代後期を中心とする時期の遺物が、D区は近世を中心とする遺物が出土する。

C区出土遺物は、土器・木器がある（第19・20図）。土器は、土師器・須恵器がある。土師器は量的には少なく、高坏・甕がある（第20図）。高坏（2）は、体部の破片で、屈曲して伸びる口縁部を付ける。調整技法は磨滅のため不明である。時期は形態からみて、古墳時代のものと想定される。甕（1）は、庄内式土器で、口縁部は「く」の字形に屈曲し、端部はつまみ上げる。須恵器は、坏蓋・坏身・甕・壺が出土する（第20図）。坏蓋（5・6）は、平坦な天井部に、ほぼ垂直に垂下する口縁部を付ける。天井部と口縁部の



第15図 19-O X 木器出土状況（1）

境界は不明確で沈線もない。天井部の削り調整は荒く、範囲も天井部の約2分の1程度に少なくなっている。陶邑編年II-3~4段階である。坏身(3)は口縁部が外反してのびる。陶邑編年I-5である。他に小破片ながら口縁部の立ち上がりが短い、陶邑編年II-4段階の坏身も存在する。麁(7・8)は、扁平な体部に、斜め外方に直線的に伸びる口縁部を付ける。口縁部の中位には1条の突帯を巡らす。口縁端部の形態は、丸くおさめるもの(7)と凹線状に窪むもの(8)がある。体部の中位には、1孔を穿つ。8は、体部の肩に自然釉がある。共に陶邑編年I-3~4段階である。以上から、19-OX出土遺物は古墳時代初頭から後期にかけての遺物をふくみ、最も新しい時期の遺物は、6世紀末で



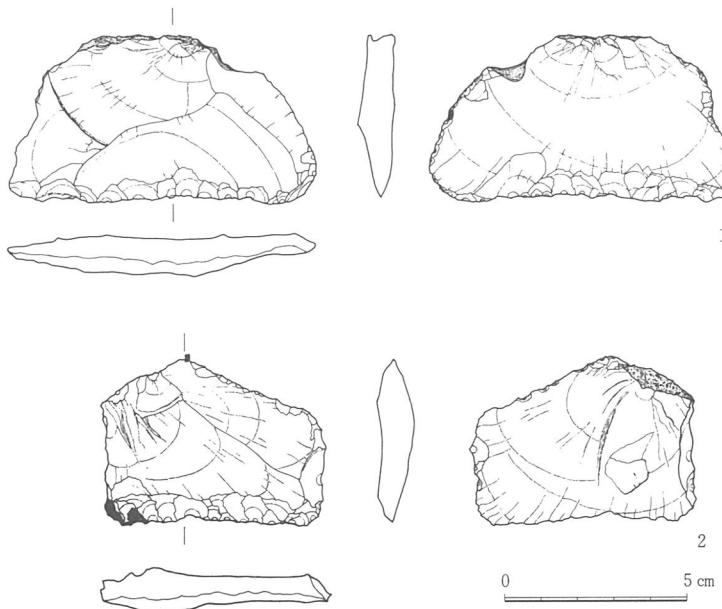
第16図 19-OX木器出土状況 (2)

ある。

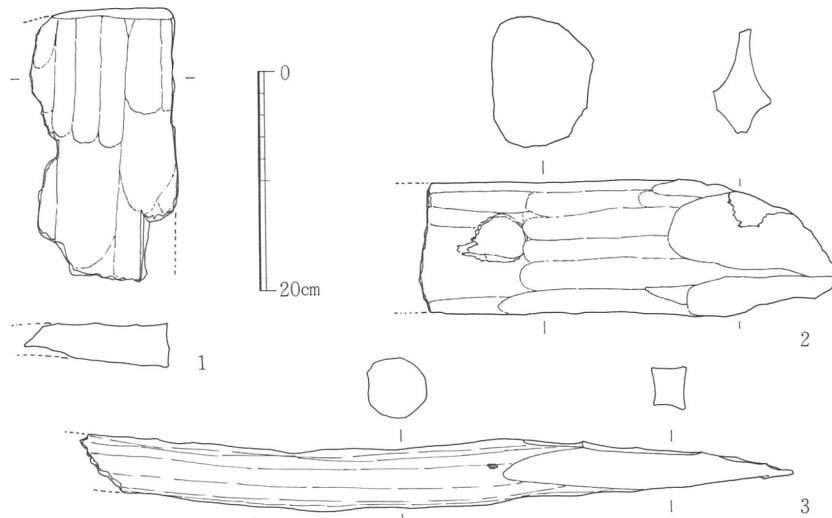
木器は、杭・板状の木製品である（第19図）。木器は、谷状の窪みの両端部分で検出した。杭は打ち込まれており、板は並んでいる。杭の打ち方には、（第17図）、規則性はない。板状の木製品（1）は、厚さ3～5cm×10cm・長さ1～1.3m前後で並んで検出した。屏が倒れたような感じである。板は腐食がすんでおり、取り上げの際、原形をとどめなかった。杭（第19図－2・3）は、垂直に打ち込まれた状態で検出されたもので、径の太いもの（2）と細いもの（3）がある。共に枝をはらって先端をとがらせるだけの簡単な成形で杭の機能をもたせている。先端部の成形も四方から削るのみである。3は、先端部の削りが長いため、2～3回に分割して削っている。他に棒状の木製品や自然木も数本出土している。



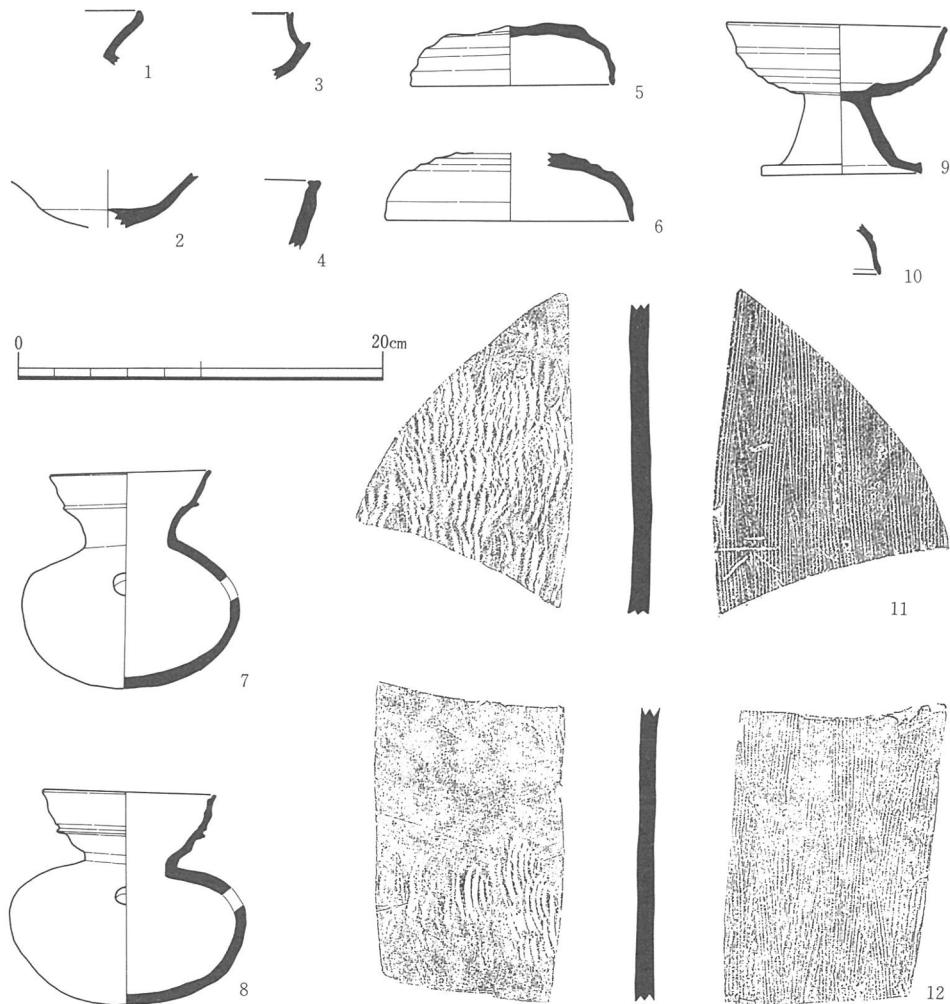
第17図 19-OX 木器出土状況



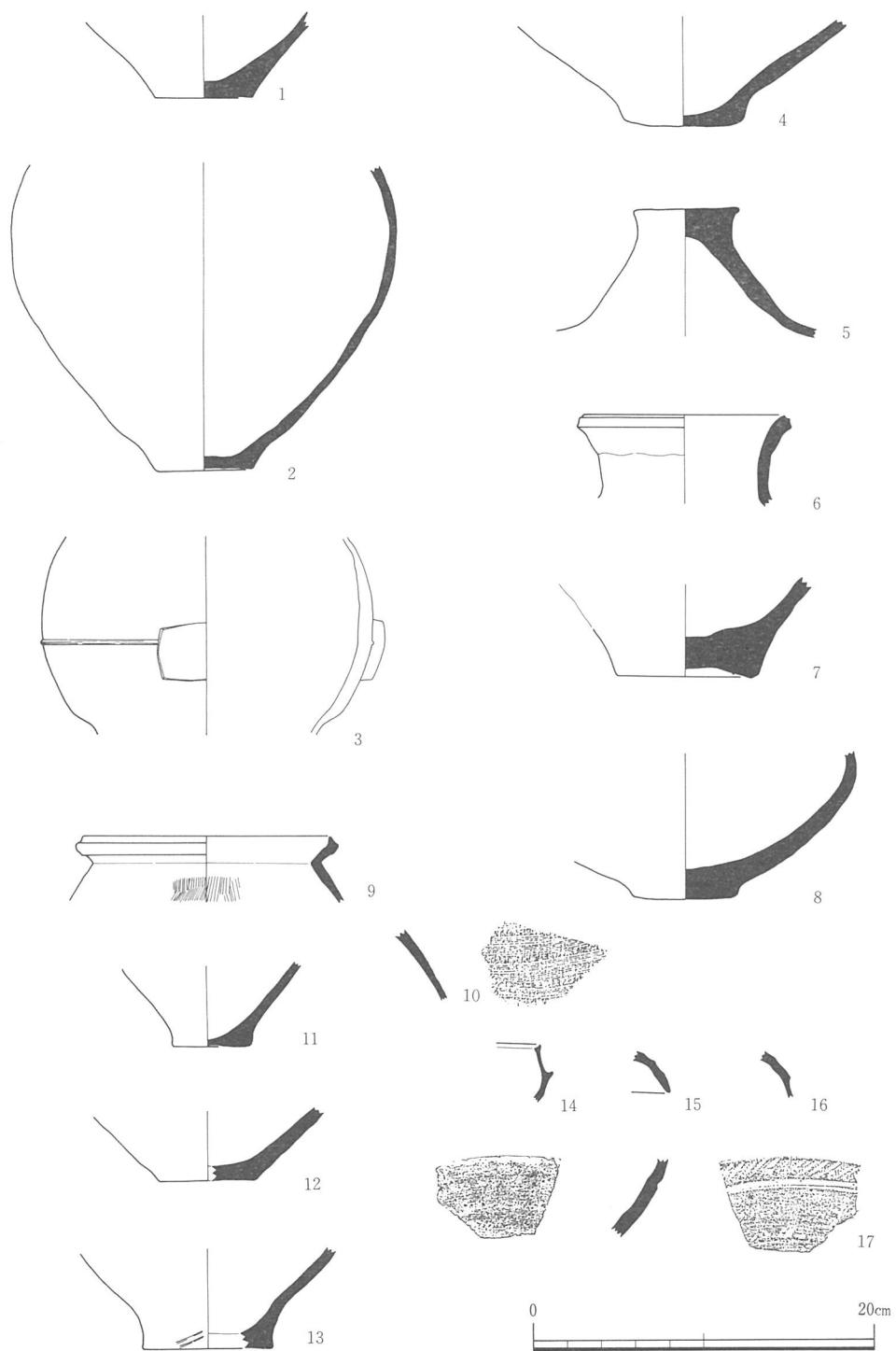
第18図 07・10-OR 出土遺物実測図 (07-OR-1, 10-OR-2)



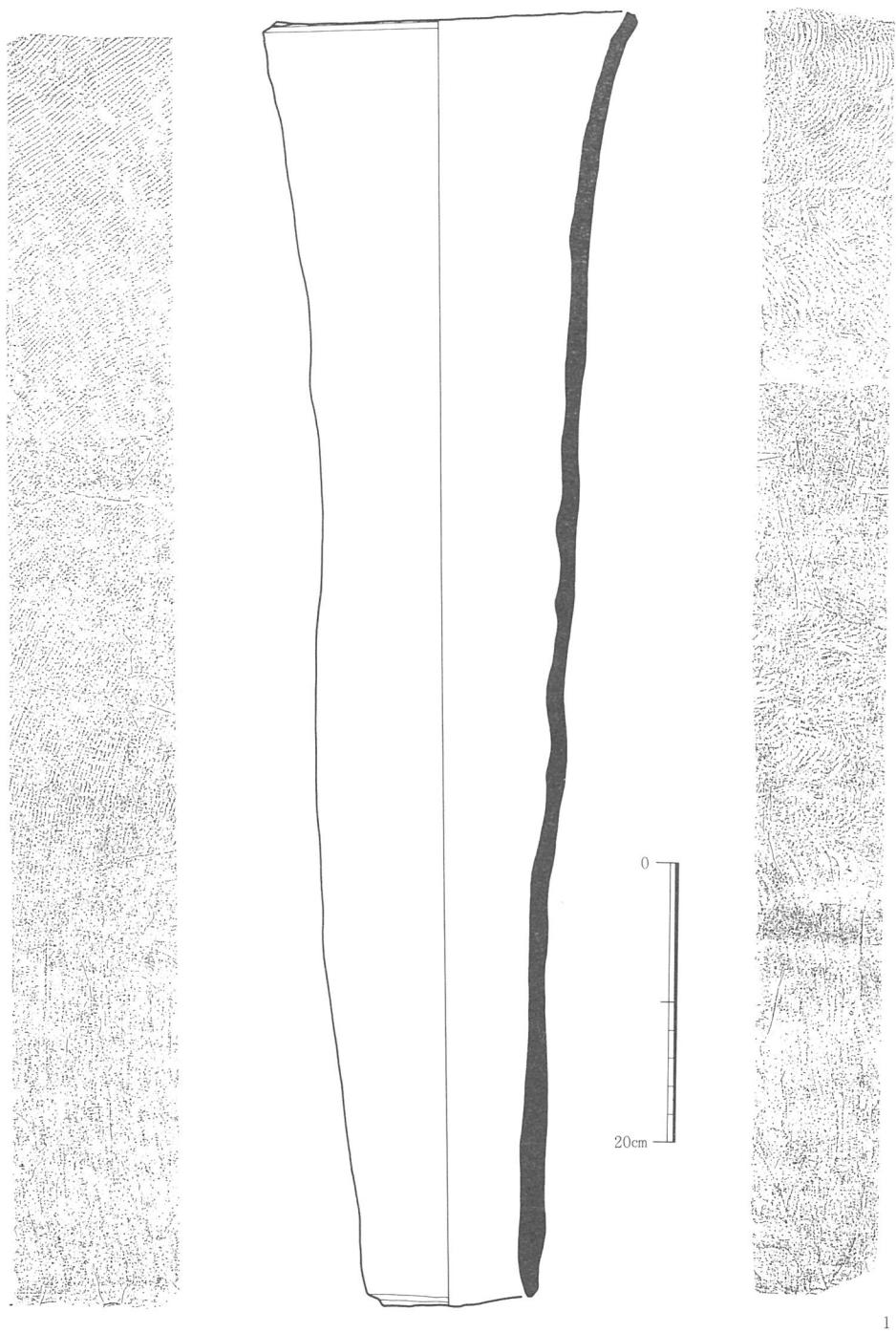
第19図 19-OX出土遺物実測図



第20図 08・09-OR、19-OX出土遺物実測図 (08-OR-9~11 09-OR-7, 8, 12 19-OX-1~6)



第21図 05・07・10-OR出土遺物実測図 (05-OR-1~3 07-OR-5~17 10-OR-4)



1

第22図 08-O R出土遺物実測図

第4節 中～近世

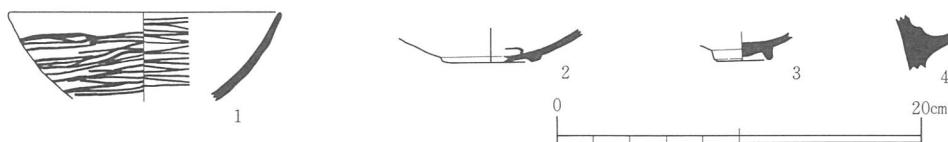
中～近世の遺構には、水田跡・土坑・溝・旧石津川の東護岸等がある。検出した遺構は少ない。水田跡は、調査区の各地域で層の形成過程に違いがみられる。調査区の東側に位置し、標高の高いA区には水田跡と想定される層が、調査区西側の標高の低いB区に比べて、より多く重層している。調査においては水田が造成された当初の時期・水田が運営された時期・水田を廃絶した時期・新たに水田を造成した時期等を把握することによって伏尾地域における沖積地の開発時期を知ることを目的として、各区共に耕作土・庄土と想定される2～4層を順次調査した。土坑・溝等は遺物が出土せず時期は明確でないが、2・3層の各上面で検出したことから近世～現代にかけての遺構と考えられる。

中～近世水田遺構（第23図・図版23）

対象とした遺構が水田跡と想定されたため、調査に際しては順次上位の2層から4層にかけて人力掘削したが出土した遺物の量は極端に少ないため、遺物の詳細な編年案が出来ている瓦器碗が存在する時期にもかかわらず、当初目的とした水田跡の造成・使用・廃絶の各時期を明確に把握する事は出来なかった。

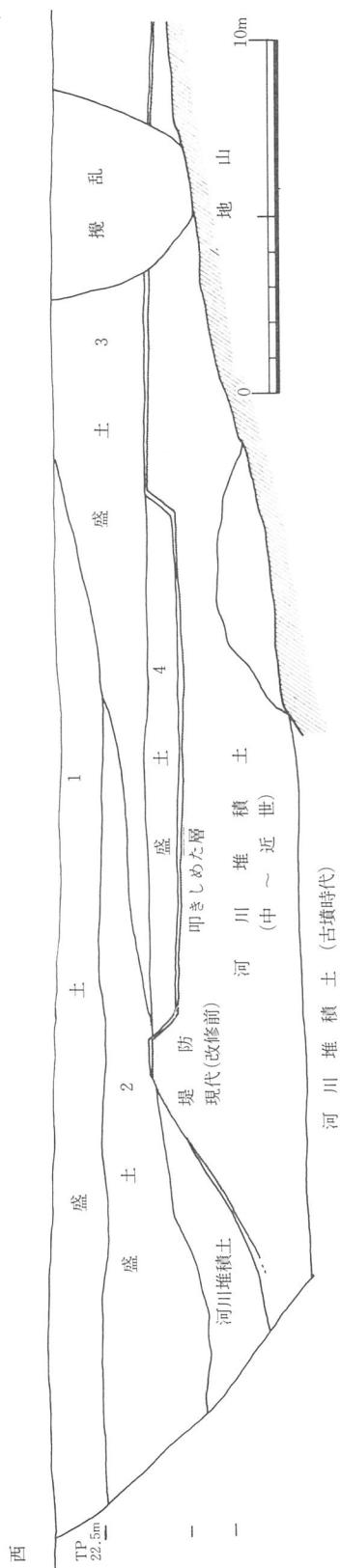
4層の下面は、A区では凹凸が激しい。平面的にみて、足跡が多数検出された。4層出土遺物（第23図）は、中世の瓦器（1・2）・土師器がある。瓦器は小破片が主である。1は、内外面には細い篦磨きを施す。時期は12世紀代と想定される。2は、底部破片で高台は台形を呈する。見込みには連結輪状の暗文がある。時期は13世紀代と想定される。4層出土遺物は、12～13世紀の時期幅がある。第3層は、a・bに区分され、A区東半部に分布する。第3層出土遺物は量的には少ない。近世の陶磁器・羽釜（第23図）がある。羽釜（4）は、鍔が水平に伸びるもので瓦質である。15世紀代のものである。白磁（3）は、底部破片で高台は削り出す。胎土は甘く釉は見込み部分にかかる。時期は15世紀初頭である。染付けは伊万里で、18世紀以降である。

以上から、水田と想定される3・4層に含まれる遺物から判断して、伏尾遺跡B地区に初めて水田が造成された時期は13世紀以降と考えられる。



第23図 中世出土遺物実測図（4層-1・2、3層-3・4）

東



石津川の旧護岸（第7・24図、図版16）

D区の西部で石津川の旧河川及び東岸に構築された旧護岸を、調査区内25mにわたって検出した。現在D区の現地盤は、標高23.5mであるが、この旧石津川の護岸は、標高21m前後で検出されており、約2.5m程度、現在の地盤は高くなっている。これは、3回にわたる盛土によって高くなったものである。盛土の時期は、盛土1・2共に現在のものであり、盛土3は、時期は不明ながら盛土1・2と土質が違わないため、ほぼ同時期と考えてよい。現在の石津川は、直線的に流れるが、これは道路建設に伴い、蛇行して流れていた旧河川を道路に合わせて、東南から北西方向に直線的な流れに変更したためと考えられる。この際、道路と旧河川の段差を埋めるために盛土を3回にわたって実施し、現状の高さになったものと想定される。護岸は表面を20cm程度叩きしめ、後に石を積上げている。堤防と考えられる盛土は、60cmの高さで幅は、80cmを測る（第24図、図版16）。検出方向は、旧河川に沿って東南から北西方に構築される。版築などされておらず、簡単なつくりである。これらの護岸・堤防は、中近世の河川堆積土の上につくられており、この層は、2.8mにも及ぶ。

以上から、石津川は、D区においては、徐々に西方向に河川の流れを変更しており、この変更のうち最も大規模に人為的な力を加えた時期は、現在とかんがえられる。

第24図 D区土層断面図

第5節 包含層出土遺物

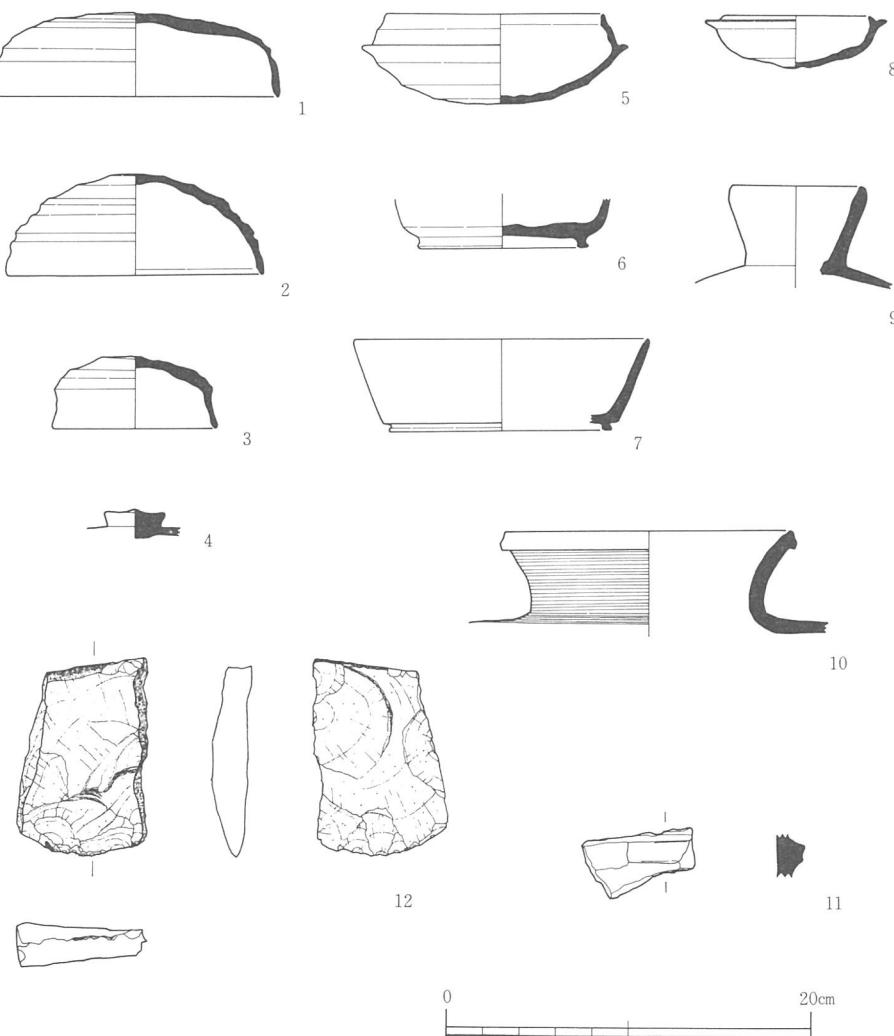
古墳時代後期の遺物は、第5層や中近世の時期に該当する第3・4層に存在する。第5層出土遺物は、須恵器・土師器がある（第25図・図版21～23）。2～4層、いわゆる中世以降の水田跡と想定される各層からは、中近世の遺物に混入して、弥生時代から奈良時代にかけての遺物が出土した。これらの遺物は、河川跡や5層の古墳時代包含層に存在したもののが、中世以降水田を造成する過程で原位置を離れたと想定される。出土した遺物は、残存状態のよい須恵器が主で、土師器の量は須恵器に比べて極端に少ない。須恵器は5～6世紀のものが量的に多く、7～8世紀にかけてのものは、少ないながら存在する。5層出土遺物は、1・2・5・9・10があり、4層の中世包含層に混入して出土した遺物は、3・4・6・7・8・11・12がある。

土師器は、ハニワ・高壺・甌がある。ハニワは、突帯を1条巡らす円筒ハニワで、突帯は横方向の荒いナデ調整で仕上げ、内面も同様の荒いナデ調整で仕上げる。

須恵器は、5～8世紀にかけての遺物がある。壺身・壺蓋・壺・甌・高壺・横瓶・堤瓶等がある。壺身は、5世紀から8世紀にかけてのものがある。高台を有するもの（6・7）と有しないもの（5・8）がある。5は、丸みを帯びる体部から水平に受け部が伸び、口縁部は斜め上方に直線的に伸びたあと口縁端部は垂直にたちあがり、口縁端部の形状は丸い。時期は陶邑編年II-1段階である。他に、陶邑編年I-3～II-4段階にかけての壺身も存在する。8は、丸い体部に、水平にのびる短い受け部をつける。斜めに立ち上がる口縁部は短い。壺身の受け部が喪失する直前の段階である。時期は陶邑編年II-6段階である。高台を有する壺（6・7）は、平坦な底部に断面台形を呈する高台をつける。体部から口縁部にかけては、丸みをもって立ち上がるもの（6）と屈曲して立ち上がるもの（7）がある。屈曲する壺身は、口縁部が直線的に斜め外方に伸びる。6は、陶邑編年III-3～IV-3・4の段階である。7は、陶邑編年IV段階である。壺蓋は、平坦な天井部に僅かに外方にのびる口縁部をつけ、口縁部と体部の境界は明確なもの（1）と丸い天井部で口縁部と天井部の境界が不明瞭なもの（2）がある。共に、陶邑編年II-2～3段階の時期の遺物である。3は、壺蓋か壺身か不明であるが内面の調整方法によって壺蓋にした。内外面ナデ調整を行い、口縁部は丸く仕上げる。陶邑編年III-1段階であろう。4は、宝珠つまみで既に扁平になっており、陶邑編年III段階以降の遺物である。甌（10）は、「く」の字形に屈曲する口縁部で、口縁端部は僅かに垂下する。口縁部調整は、外面カキ目で仕

上げる。陶邑編年 1 – 5 ~ II – 1 段階である。壺は、口縁部の破片が存在するが、小破片で時期は把握できない。堤瓶は、口縁部の破片まで横方向のナデ調整で仕上げる。陶邑編年 II – 2 ~ 3 段階である。高坏は、脚部の破片で、短脚 1 段透かしや長脚 2 段透かしのものがある。横瓶は、体部の破片でカキメで仕上げる。出土した須恵器の残存状態は、比較的良好である。石器（12）はやや風化の目立つサヌカイト製で四辺形を呈する凸刃削器である。うち 2 辺には自然面を認める。打面及び打点は不明であるが、図示した右側が主要剝離面になる可能性がある。背腹両面に異方向の複数の剝離痕が認められる。

2 次調整は図示した下縁側両面に認められるが、丁寧ではない。やや凸刃となる。



第25図 包含出土遺物実測図 (5層-1, 2, 5, 9, 10 4層-3, 4, 6~7, 11, 12)

第4章　まとめ

第1節　遺跡の変遷

伏尾遺跡B地区は、石津川中流域の沖積段丘に立地する。調査区は、南西から流れてきていた旧石津川が、調査区内のC・D区で大きく蛇行し、北西方向に流れを変える地点（この東岸ラインは、現在の地割りの上に生きている）、いわゆる旧石津川の東岸とこの河川を眼前に望む平地であるA・B・C区によって成り立っている。

平地部分には、各時代共に住居址等の遺構は検出されず、石津川の大河川に流れ込む縄文時代から古墳時代にかけての小河川が縦横に存在する。

縄文時代の河川は、A区で3条検出したが東から西方向に流れる。堆積状況からは、この小河川の水の流れは急激であった事が判明する。遺物は微量であるが、河川堆積土から出土する。河川の周辺には、縄文時代の生活面が各区に存在し、所々に炭の分布がみられるため、縄文時代の遺構の検出される可能性は高いと想定される。弥生時代～古墳時代後期にかけては、縦横に小河川が流れる。縄文時代の河川跡とは流れる方向を変える。各時代の河川堆積土は、縄文時代の河川と同様で水の流れは急激である。7～8世紀にかけては、遺跡からは遺構は検出されないが、中世包含層中に微量の遺物が存在する。9世紀～11世紀は、遺構・遺物は検出されず、空白期である。1点の遺物も存在しないことは、石津川を望む荒れ地であったとしても考えるしかない。中世～近世にかけては、調査地は水田化する。水田化する時期は、13世紀以降の時期と想定される。周辺の段丘上に位置する平井遺跡においては、本格的に水田化する時期は近世以降であるのに比べて、沖積段丘に立地する伏尾遺跡は、かなり早い時期鎌倉時代に既に水田化していることが判明する。

第2節　出土遺物について

1、弥生時代I～II様式の土器について

出土した弥生時代I～II様式の土器は、壺・甕・蓋がある。弥生時代前期の土器が出土した例は、石津川流域においては、四ツ池遺跡・鈴の宮遺跡・西浦橋遺跡・上町遺跡等がある。四ツ池遺跡は、中期へと大規模に展開する、石津川流域における拠点集落であり、鈴の宮遺跡も中期の時期に盛期をもつ集落である。伏尾遺跡B地区は、石津川の中流域に

あたる。調査区からは、旧石津川の東岸が検出されている事から、河川に近接した東岸地区に該当する。この地区からは、弥生時代の集落に関する遺構の検出はない。旧石津川中流域の東岸地区で、本流に流れ込む支流の堆積土中から出した5点にもみたない弥生時代I～II様式の在地系土器、また生駒西麓産土器の存在を今回は指摘するにとどめ、その検討は、中流域における弥生時代I～II様式の遺構・遺物の資料増加をまって行いたい。

2、08-O R出土の古墳時代後期の須恵器について

6世紀後半に最終に堆積した08-O Rの中から、土管状の遺物が出土した。この遺物と同一器形になると考えられる小破片は、同一遺構や中世包含層中にも存在する。他遺跡における類例は、須恵器では猿投窯の岩崎77号窯で、瓦質では飛鳥地方の川原寺・和田廃寺・飛鳥坐神社北接地・水泥古墳・藤原宮跡・酒船石東方地などにみられる。飛鳥地方の各出土例は、瓦質で明確に暗渠排水管として使用されている。猿投窯出土例は、「高台のある壇身と宝珠紐にかえりのついた蓋をもつ壇」の時期であり、長さ60cmが標準寸法で径は5cm前後である。伏尾遺跡出土例と比較して、時期も新しく、寸法も小さい。伏尾遺跡出土例は、完形であり、大きさは、猿投窯出土例と比較しても大きい。用途の推定等今後の課題としたい。

3、08-O R出土の土器にヘラ書きされた「六」について

08-O R出土の土管状の遺物と同一器形と想定される破片に書かれた「六」の時期は、共伴遺物から6世紀後半と考えられる。6世紀後半の時期で、「六」と須恵器工人が漢数字を意識して書いたのであれば、日本における文字の歴史の上でこの遺物はどのように位置づけられるのだろうか。

日本における文字は、古墳時代においては、土器に墨書したものとヘラで書いたもの、また金石文がある。管見にのぼるものには以下のものがある。

墓誌・土器に文字を書いた資料

1、静岡県神明原・元宮川遺跡出土5号木簡

「相星五十戸」－6世紀中葉～7世紀中葉の須恵器共伴

2、大阪府船氏王後墓誌－日本墓誌で最古

漢数字多数刻まれている。

記年一天智7年（668年）

3、大阪府堺市野々井遺跡出土須恵器壺

ヘラ書きで「門出杉林方」－5世紀末

ヘラ書き土器で日本最古であるが、漢数字はない。

- 4、愛知県・勝川遺跡、5世紀末から6世紀前半のハニワに「子」ないし「干」、「日」か「目」かヘラ書きされている。
- 5、岡山県・土城が端古墳、6世紀末から7世紀初、須恵器壺蓋内面に「取」とヘラ書きされている。
- 6、岡山県邑久郡・水落古墳・陶棺に「南」とヘラ書きされている。



第26図 「六」（原寸）

金石文の資料

- 1、奈良県七支刀 東晋の泰和4年銘（339年）
 - 2、奈良県・東大寺山古墳鉄劍（4世紀後半）
 - 3、熊本県・江田船山古墳大刀
雄略朝代～反正朝代？（5～6世紀）。漢数字は、「八」・「四」・「十」・「三」・「六」が存在する。
 - 4、埼玉県・稻荷山古墳鉄劍
辛亥年-471年説が有力である。「七月」の漢数字が存在する。
 - 5、他に6世紀の金石文としては
愛媛県・伊予温湯碑-法興六年（596年）、奈良県・元興寺 盤銘-丙辰年（596年）があるが現存しない。
 - 6、島根県・岡田山古墳大刀-6世紀後半
銘文中には、漢数字は存在しない。
 - 7、兵庫県・箕谷2号墳大刀
戌辰年-608年説が有力であるが、548年説もある。「五月」の漢数字が存在する。
 - 8、千葉県稻荷台1号墳鉄劍-5世紀中葉と言われるが、漢数字は存在しない。
- 以上から、金石文には、5～6世紀と考えられる漢数字が見られるが、ヘラ書きで土器に書かれた漢数字での日本最古での例は、神明原・元宮川遺跡の7世紀中葉の「五」である。伏尾遺跡出土例は、6世紀末の時期であり、もしこれが漢数字としての意味を与えられて書かれたのであれば、日本における最古の例になる。